

池辺小学校PTA 母親委員会読書サークル

## ふる里池辺を愛する人に発刊に寄せて

## 養老町教育長 高 木 正 義

が想像されます。

なりました。心からお祝い申しあげます。尽力で「池辺の昔話」第二集が発刊されることにの度、池辺小学校PTA読書サークルの方々のご四年前に発刊された「池辺の昔話」に続いてこ

L なされ る作業は大変だったと思います。それを見事にこ 地 て敬意を表します。 いことと存じます。更にこの仕事に取り組まれま た方 域の方々から聞き取り、それを整理・編集され 昔の多くの人 々のふる里池 この冊子にまとめられました。 Þ が村の発展につくされたお話を、 辺への深い愛情に対し、 素晴らし 改め

ことばです。昔の人も、今池辺で生活している方々「むかしばなし」不思議な暖かいひびきをもった

るお話が、こんこんと泉のように湧いてくることられました。そんな生活の中で人や自然にかかわも池辺の美しい自然と風土の中ではぐくまれてこ

達の将来に郷土愛として生きづいてくれるものと達にしっかりと伝えたいものです。きっと子どもさしく語りかけてくれます。この心を今の子どもく話きて感じられるものです。そして私達にやて話には、祖先のこの地をひらかれた息吹きが

生きる上で一番大切な事だと思います。いものを見い出すことをいっているもので、人間ことがらを学んで、そこから気づかなかった新しこ故知新ということばがあります。それは古い

思います。

くりに大きな力となってくれることを期待します。この冊子にもられている物語りが、ふる里池辺づ新しいものを求め、追い続ける現代生活の中で

# 心にふるさとがある子ども

## 池辺小学校長 西 脇 茂 樹

ようにまとめてくださったのがこの本です。わっている話や実際にあったことを楽しく読める読書サークルのお母さんたちが、池辺地区に伝

す。

たり、 直 お て相談をしたり、 した 話を聞き、 お 母さんたちはこの本を作るために何回も集まっ り、 資料を集めたりされました。それをもとに 地 元 そのあとでみんなで読み合って書き の いろいろな人に会って話を聞い 種 田丹治先生と後藤有康先生に

ころに入っているカットは、 を を 絵 池 こうしてお母さんたちが作ってくださったお話 小学校 あら わ L の子たちが読んで印象に残ったこと てく 扎 ま こした。 そのようにしてかい この本のところど

4

ていただい

たりしました。

てくれた絵の一部です。

合わせて作りあげた本であるということができまして種田先生はじめ地域のたくさんの人達の力をだから、この本はお母さん達と子どもたち、そ

との本はふるさと池辺の心の財産でもあります。 この本はふるさと池辺の心の財産でもあります。 この本はふるさと池辺の心の財産でもあります。

心を持ち続けてください。張り、池辺のど根性とふるさとをたいせつにするそしてこのふるさと池辺にしっかりと心の根を

#### 発 刊 に よ せ て

### PTA会長 伊 藤 義 雄

どえ **れ**え お ŧ L え 話 や。」

こお ŧ あ る の か。

これ が、私の素直な感想です。

池辺の昔話第二号」の発刊の予定の話を聞いた

時は、 本にするほどの 話が、まだ残っているのか、

た。

完成できるのだろうかと、 よぎりました 不安と期待が頭の中を

た。 サ まだまだ残したと、 ク シレ の 方 私の心配を跳ね除け、多くの話が読書 々の 手で、 聞き及んだ今は、驚きで 池辺中から集めら į١ 、まし

の お話 各地区へのアンケート収集に始まり、 の聞きとりと、作業が進められました。 古老の方々 そ

杯です。

中にこもっ こに心 和む一時を過ごすふれあいもあり、 たあたたかい ざと、 池辺 地 区の お話 歴 史の の

深さや、郷土のすばらしさを感じました。

読書サー

クルの活動はさらに子供達への

読み聞

んの心が本という形になったのだ。」と思いまし さんのバイタリティーだ。子を思う心だ。 びに、「あぁ・・・ か せと展開 してきました。そうした歩みを聞 これこそ、真実の活 動だ。 お母さ お母 くた

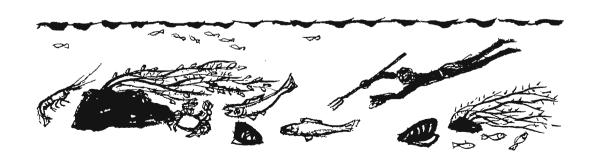
ています。 の一冊の本に多くの人の心が、 その鼓動を池辺の子供達の心 脈々と波打っ の中に伝

えていく読み物となると信じてい 発刊 にあ ったり、 お話 を聞 か せ て頂 ŧ す。 V た 方々、ご

指導下さいました方々に心からお礼申し上げます。

おもどり地蔵さん	おたどさんの雨ごい	平田公の三つどんぶり	権 作 と ま つ	平池の四季	太鼓を買った池の主	虫おくりの日に	正吉の夏	血の出る木	根古地のていぼうがきれた	目
42	38	36	31	23	19	11		5	1	

尾ぉ	7	7.	釜段に伝わるお話	天照寺	学さ	根古地村	桜	大にぎわいの大巻上まつり	
	その二	その	投えに	炽 <del>美</del>	童さ	地	色	にぎ	
張り	<u></u>	<u> </u>	伝	0)		村	の	ゎ	
	nder to	<b>∕at:</b>	わっ	観音様	疎₹	の	宝	()	Ł
橋は	鷹か	徳	るお	日 様	開か	追し	物	大	地地
TIPE U	屋ゃ	永	話	1000	1234	の道しるべ		巻	お地蔵様の
	番をし	17.			•	ベ		上数	様の
	敷き	除				:	•	3	お
	:	(とくながよげ)		:			•	り	お祝
		<b>&gt;</b>			•			:	()
	:	が		•					:
•		よ							
•		$\overline{0}$						•	
									:
						:		•	
		:		•		:			•
		:		:	•	•			
:	•	:		:	•				•
•	•	•		•	•	•	•	•	
82	<b>76</b>	<b>74</b>		<b>7</b> 1	68	65	<b>57</b>	<b>5</b> 3	47



# 根古地のていぼうがきれた

ے 礼 は、 おまえのおかあさんが おなかの中に

1 たころの まから三十五年まえ、そうそう昭和三十四年 は な らしや。

の夏やった。

その年はな、 雨 が バケツをひっくりかえし たよ

うに、 たくさん たくさん .አ、 っ たんや。 それで

牧き 田 だ 川の水が あば れだしよった。

ぼ にうに 水のいきおいが あながあ V てしまった。 つよくてな。 根古地 ボ コ ボ コ の ボ てい コ ボ

コ 水が わきだしてきよっ た W po

大ぜい W や。 うぼうの人やら、家の力もちの人やらが あつまってきてな、あなをふさごうとした すなのは V っ た ふくろをつんだり、くい

をうちこんだ。

ていぼうはたいせつなんや。 池辺をまもっていいけべ

るからな。

けどな、 水の力にはかてなんだ。

あなが

だん

だん 大きくなっていきよるんや。

「もう、だめだ。 サイレンの音や、 みんな にげろ。 にげろ!」

ン はんしょうの音がなりひびい た。 ウーウーウー

カンカンカンカ

それをきいた人たちは、 にげだ した。

「牛は、かぞくといっしょや。 にもつほ つ といて

でも たすけにゃならん」

といって、なんとうも牛をつれだしてにげてくる

もいた。

人もいた。

にもつをリヤカー

に

つんでにげる人

うへといそいだんや。へび・かえる・バッタ・犬・ そりゃもうみんな ひっして まわりのていぼ

ねこまで にげてきたそうや。

八月十三日ごご七時五十分やった。 ていぼうは、

いの子が、百二十人手をつないだ大きさやったんどろ水をはきだしたんや。そうやな、おまえくら大きな大きな口をあけて「すごい」いきおいで

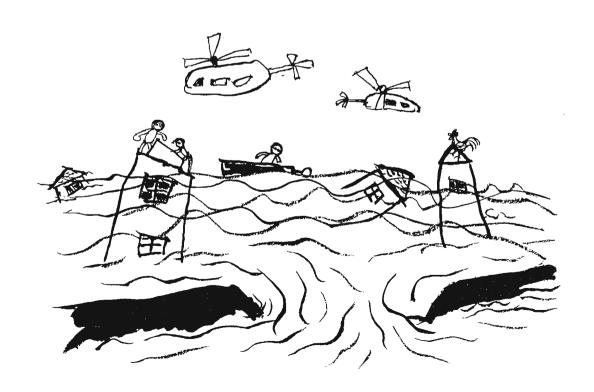
も かみたども どろ水の海となってしもうた。あっというまに 池辺も かさごも ひろはたしまいよった。

た。

そういって

おばあさんは、ためいきを

やねや んの ないとったわ。かわいそうで どろ水の中に そうやなあ、 みわたすかぎり どろ水の海。たんぼも いえも たかい木の どろ水の中や。見えるのは、二かいの しずんでいくのを ともだちのいえも おまえのような小学生はな、じぶ てっぺんだけや。 かわいそうでな。 見て 池辺小学校も みんな ある



もいたと きいとる。トで たすけたそうや。にげおくれた人が二百人つかまっとる人や 木につかまっとる人を ボービえいたいの人がなあ、にげおくれて やねに

その夜は、ろうそくも でんきも なく まっかなしそうに ないとったということや。人げんだけやない。にわとりも やねの上で



くらな中、ただ ぼうぜんと 一やをすごしたん

ゃ。

こ とんで かなしい できごと ひさんなようでもな、しんぶんしゃの ヘリコプターが 空

そしたら「がんばってください」と ぜんこくすを うつしたんや。

から もうふや かんづめ ふくなどが とどい

た。

の町からは、たくさんのおにぎりがとどいた。果からも、のみ水をつめた、くるま二台、近け

おいしかった。ありがたかった。

どんなところで

ねとったかって。

んや。たっていぼうにトタンいたや、木を集めて作ったたっていぼうにトタンいたや、木を集めて作ったをりゃあ、雨をよけるだけの、そまつな小屋やっ

力をあわせて すごしたんや。 そんでな、みんなで ごはんをつくったりして、

<

ケ月して、ようよう水 が Ŋ ĺ١ た。

こうずいでな、 ながされた家十七けん、

こわされた家 三十三けんもあったんや。 どうに

か たすかった家も どろがいっぱいで 中 ·に入れ

スコ ッ プで どろを ほりおこしてなあ よう

な

W

だ。

て、ようようすめるようになっ よう中に入ったんや。こわれたところも たん やが、 なが بخ

なお

L

町がす れて、 根古地公園に、 家がなくなってしまった人の かりにすむ家をたててくれた ため に、 県や

んや。 ほんとうに、 たいへんやった わ。

そん な時、 しんじられへんことが おこっ た W

九月二十六日やった。 いせ わん台風とい って、

や。

大きな大きな台風 が やっ てきた んや わ。

根古地 九 月二十 のてい ぼうが 日 時 まえより大きな口をあけて 四 十二分。 ま夜中 p っ た。

> きれ たん や。

けんもの家をながしてしもうて、 二度も

ے

あうなんてなあ。

んなめに

お そうや ばあさん そうや、 は 目を 11, 学校の しょ 子は、 ぼ L ょ 教科書 ぼ 科書 Ł せ た。 もなく

なってしまって こまっとったらな、 ただでもら

りっ えた。おまけに、 ぱなピアノを アメリカのえいがスター 池辺 45 学校と かさご小 か 学校

とに おくってきたんや。 V ろんな人に 力をか

りて、ここまで生きてきたんやわな

それから、また、おばあさんはい

っった。

池辺にすむ人は、 む か しから水が なが 礼 だ さん

この ように 池辺のとちを ح ね が つ てきたこと。 まもってきてくれたことを。 たく さん の 人

ぼ くは、 外へ出 7 てい ぼうを見た。

高 vì 高いりっぱな てい ぼうがそこにあっ

#### 血 の 出 る 木

ん…? なんだって:

ここらあたりの むかしの はなしを

ききてえだって?

あきじいさんは いろのはげた キセ ルを

なれた手つきで 口にくわえ 大きく いきを

すいこんだ そして:

ふぅーと まるで ためいきのように

白い けむりを はなや 口から はきだした

田 植 えの おわ つ た ば か りの 田 W ぼ が

キラリ キラ

青い 空の下で 光を うけている

うっうん

あきじいさん は のどのおくを ひとつした ならすように

小さな

せきばらいを

岐阜で 下池という このあたりはよぉ いちばん でっけぇ池があってなぁ むか しは

こいや ふなや うなぎなんぞ そりゃあ

いっぺえ とれたもんよぉ

それに かもなんかも 池の 水が

見えねぇくれぇ やってきてよお

てっぽううちが よう来とったわぁ

ズドン! ズドン!

そりゃぁ ようけのこと かもぶらさげて

かえってえたわあ

たなぁ そう そう これが ゆでてたべると わしら 船こいで ひしとりにも行っ うまくてよぉ

あの池は してくれる 村のもんの 大事な 池やったんやでぇ・・・ 腹ん中 ٧١ っぺいに

そんでもなぁ 雨がふるたんびに 池 の水が

あふれてまってなぁ

なにしろ 土地が 低い んだ わあ

あっ ちの川 こっち ó 계 か 5 水が ながれこんで

V ね が 水 がた しに なっちまってよお あ

げく

の

は

てに

てい

ぼ

うが

きれてよ

米なんぞ ちっともとれえへん…

ほんとに やっかいな 池やったんやでえ

なんとか できんもんかのぉ…」

や

っぱ

ŋ

米が

ようけとりてぇ」

みんな そう ゆうてなぁ

あ あしたら どうだ こうしたら いいんじゃ

ね え か::

なんども そうだん した んや わ あ

池 を ふたつに わ けて てい ぼうを つくった

V び )1] の あ すなをはこんできて 池 を うめた…

そ ŋ p てい んだったぁ・・

そんで 水が ŧ あ ٤, れてしまうんやわ 雨 が <u>.</u>ያ‹ るとなぁ あ

> そしたら ある人がなぁ

「池の水を かいだして 田んぼにしたらどうや…」

そう 言わっせるんやわ

そんなこと どうやって できるんや あ

みんな できへん できへん ゆうてなぁ

あきらめとったんやわぁ

それ が な あ

は V 水機という 機械をつか ってなぁ

池の水を かいだしに か か つ た W p

ポ ン ポ ン ポ ン ポ

あさ

はようから

よる

おそうまで

じゃぶじゃぶ 機 械 の音が しとってなぁ じゃぶじゃぶ

かいだして おったわぁ

それ 水を がなぁ 少しずつ 少しずっ 池

の水が

なくなっていくとなぁ

池のまんなかあたりに 大きな木が

頭をだしてきたんやわぁ

三尺ぐらい あったかのお

あみを うって 魚をとろうとしても

じゃまになってしまうし

どっちみち 田んぼにするにしても

じゃまになるし どけたほうが ええ…

と いうことになってなぁ

なわでしばって ひっぱって みたんやけんどわしと 村のもんたぁと いっしょに その木を

びくとも うごかん

そんなら のこぎりで 少しづつ切って

ゴリゴリ ギシギシ

はこぼうかと

ゆうことになってなぁ

一日かかっても 切れえへん ほんとに

かってえ木でよお

次のあさ みんなで 舟にのって その木の



そばへ 行ってみるとよぉ

ポ タリ… ポ . Я ·リ::

木 . の 切り口 か 5 ŧ っ か な血が 池 の中へ

おちとるん p わ

木の まわりの水が まっかに なっとてなぁ

まるで 木が泣えとるみてえだった

> 今尾の それになぁ 狩人が あとで 聞いた話やけんど

「そんな かたい木なら

てっぽうの

えでも

作ろう」

そうゆうてなぁ むりやり 木を切って

もってたんやと・・・

それがなぁ てっ ぽうは 作ったんやけんどなぁ

片目を うしなってまった W やと

たたりじゃ 村じゅう 大さわぎに あの 血 の出る木の なってしまってのお たたりじゃ…

キセ そこまで ルの 灰を はなすと ポンと あきじいさんは 足もとにすてて

三日三晩

うん

うん

うなされて

もう

からだじゅ

う

あつうて

あつうて

なってまったんやわ

舟のへりにしゃがみこんで

うごけぇへんように

さむけが

してきてよお

わ

しゃぁ

足もとから

ぶるっ

ぶるっと

陽にやけた 大きな手で ごりごりと

頭をかいた・・

けが人がでたら

たいへんじゃ

いた おこしたりと 村 ええことあらへん 「これ以上

腹

ほ

か

の

の

 $\boldsymbol{t}$ 

W

ŧ

足

を切った

死

ぬく

れえ

えらか

っ

たんやで

ねこんじまった

祖父江の善光寺さんに、供養してもらった方があの木は、何かいわれのある、木かもしれん

ええにぃ」

村のもんたぁが あつまってよう

住職 さんが

お寺さんに

たのみに

v

ったん

やわぁ

「なむあみだぶつ なみあみだぶつ…」と

お経さんを となえるとなぁ

それまで なわで 引っぱっても

うごけへなんだ 木がよお

引っぱり出せるんやわぁするするっと 池の中から

もちろん ポタポタ ながれとった

血も止まってしまってなぁ

そりゃ ふしぎなことやったなあ

竜が 天に昇っていくようなこれが その木につけた名前だ

形を していたからなぁ

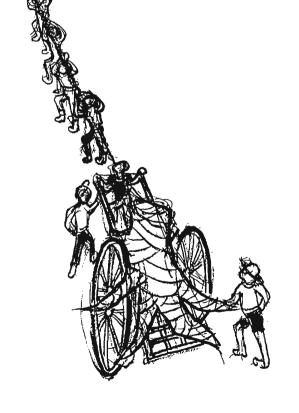
みんなで きれいに あらって まっしろい

しんぴんの さらしを まいて

ヨイショ! ヨイショ・

大八車にのせてよぉ

祖父江の 善光寺さんまで はこんでったんやわぁ



作らしたということや

今でも 善光寺さんに 大切に 大切に

おさめられていると ゆうことや

「なんまんだぶ… あきじいさんは なんまんだぶ…」 口 の中で なにやら

もごもごといいながら 少しのあいだ

目をとじていた

そして ゆっくり 目をあけると

とても おだやかな声で 言った

ほれみてみい いねのなえが 気持ちよさそうに

田 W ぼ の中に うわ っとる

魚や か ŧ が ようけとれた 池は

なくなってしまったけんど

そのかわ h 秋になると ここらあたりは

۲ が ね の 米が じゅ うた んが ひろがってよお

とれるように

なった

ようけの

ありがてえこったぁ・・・

その時 あきじいさんの 目 の前 の 弧に 田 んぼを

えがくように とんでい つ た

羽

の鳥

が

V

ね

の苗

すれ

いすれに

を

つばめだ

ほ う あしたは 雨になるかも L 扎 W

の お

あきじいさんの あしもとで あざみの花が

うなづくように 風に ゆれた

### 正 言 の

夏

### 虫おくりの日に

 $\subseteq$ 

۴

サ

だ:.。 ح お てりとつけたひえが、落ちてきた。 ひえを抜こうと は、 やすおが、サッとかくれるのが見え とっさにそう思い 正吉 の幼なじみだ。 うつむ いた正吉の前に土をぼ となりの田んぼを見る ひえぬきを終わっ やすおのやっ た。やす て正 っ

続い と舌打ちしなが 「チェ た 雨の ッ。 せ V 5 か 稲 ね の 間 か るんだ足もとから に身をか が めると、 むっ 長く

吉をか

らか

L)

は

じめたのだろう。

正吉は

まだ半

きた。

分も終わってい

な

だまま、 ひえの穂も うすっぺらな稲の葉先も それより背を伸ば としめった空気が鼻をついた。暑く、風もない。 目 o) 前をおおってい ゆらりとも動かない。 る稲 の 正吉は か ぶ の 行 か した 列 が W

「あああぁー、あそびてぇなぁ。」

ながめた。

たとあごの先から、汗が足もとに落ちた。思わず大きなため息をついた。とたんに、ぽたぽ緑のトンネルが、どこまでも続いているようで

ドサッ! 今度は、正吉の後ろにひえが飛んで

た。茎の色が、 で…そう思いながら んだ。わしは、まんだ、 正吉は、かがんだまま 「やすおぉ うすい茶色に変わっているところ やめろぉ 目 ひえぬきしんならん やすおの方にむかって叫 ا پ の 前 の 稲 を見たときだっ の

がある。 しがみつくように入っている。 指先で茎をさいてみると 白 い小さな虫

「なんやぁ、これ!」

よく見ようと 顔を近づけたときだった。

ベチャ!という音と同時に

何やらべっとりと

頭上を 流れていくのが わかった。 ひえが飛んで

きたのだ。

「やすおぉ ー、よくもやったなぁー。」

た。 をつかむと 正吉は、 虫のことなど忘れて 思いきりやすおの田んぼに投げつけ 飛んできたひえ

わなを作った。 出ると、伸びほうだいの草をむすんで輪を作り、 そうと思ったのだ。 そして、どろだらけの顔のまま、あぜ道に走り やすおを おびきよせて ころば

やすおぉー、 てこおい。」 ひきょうやぞおー。 こっちぃ、

出



正吉は、叶びながら、ちらっととうちゃんの

いいわけのようにつぶやきながら、やすおが、か顔を浮かべた。ほんでも、やすおが悪いんやでな…

くれているらしい田んぼをにらみつけた。

ばらくすると、

やすおが、ピョーンと飛ぶよ

けの正吉の顔を見て、一瞬おどろいたようだったうに稲の中から顔を出した。やずおは、どろだら

が、 
一瞬おどろいたようだった

「あっかんべー。」

ぶるんぶるんとまわして、またひえを、飛ばしてと、大きな舌をベロリと出した。そして、両手を

きた。

がって、正吉は、力がぬけていくような気がしてのいきれに包まれ、あおくささが、身体中にひろつく間もなく、顔から草の中にたおれこんだ。草分で作ったわなに足をひっかけてしまった。腕を正吉は、飛んできたひえをよけようとして「自

いた。

「しょうきちぃー、早うひえぬかんと 日がくれ

るぞぉー。あばよぉー。」

笑っているような やすおの声がだんだん遠く

なっていった。

「やすおの どあほうめ…。」

正吉は、腹立たしさとなさけなさを はきだす

なると、両手を広げたまま、ぼんやりと空を見てようにつぶやいた。そして、ごろんとあおむけに

いた。

くような気がして、思わず指先の草をつかんでい間、正吉は、ぐんぐんと青い空に吸い込まれてゆはてしなく広がる青い空。大きく息を吸った瞬

た。

えぬきのことも、もう、どうでもよくなっていた。揺れるのが見えた。何だか、やすおのことも、ひ風がゆるりと顔面をとおりぬけ、まわりの草が

目を閉じると、瞼の奥がじりじりと焼けるような

のふちを(さまよっていた。)気がしていたが、いつの間にか)とろとろと眠り

飛び回っていた。両腕を広げて駆け抜けるだけで、正吉は、どこまでも続く稲の海を、風になって

緑色の波が、つぎからつぎへと重なるように流れ

えーいっ、突風になって、おどろかせてやあっ・・・、やすおがひえぬきしてるぞ。

ていった。

どうやぁ、わしは今、風になっとるんやでぇ…。えーいっ、突風になって「おどろかせてやれ。

あああぁ…、ええ気持ちやなぁ…。どこへでも、自由に飛んで行けるんやでぇ。

 $\stackrel{\frown}{:}$ 

チリチリチリ チリチリチリ

ジーン ジリジリジリ ジーン ジリジリジリ

の虫たちの鳴き声が、絶え間なく聞こえてくる。戸をあけはなした縁側のむこうの暗闇から、夏

「今年は、ずい虫(稲虫)が ようけおるようや

で 虫送りをするんじゃと…。」

「ほうかね、そんなら、わらを まわししとかん

といかんねぇ。」

「みんな てぇへんだけんど、ずい虫やっつけねぇ

と、米がとれねえもんなぁ…。」

をぱたぱたさせながら、虫送りの話をしていた。

夕飯の後、とうちゃんとかあちゃんが、うちわ

「むしおくり…?」

ふとんに ごろりと横になっていた正吉は、亀

のように首を持ちあげた。

正吉は、とうちゃんに(こっぴどくしかられてい昼間、ひえぬきもせず草の中で眠ってしまった

上で「眠ったふりをしていたのだ。た。夕飯もそこそこに「ふてくされて」ふとんの

「とうちゃん、虫送りってさぁ・・・、 たいまつに火

つけて つやろお。太鼓どんどんたてえて 祭りみてえ 田 W ぼ の中をあっちこっち歩き回るや

でおもしれぇなぁ…°」

正 古古は、 ついさっきしかられたのも忘れて、 浮

き浮きした顔で ふとんからはいだしてきた。

かたれもんがあい。」

とうちゃ んは、そう言いながら 正吉をにらむ

ような顔をしたが、 口もとが笑っているようだっ

た。

「正吉、おめえも もう十才だから わかると思

うけんど、わしら百姓にとって 虫送りってい

うのはなぁ、大事な行事なんやでぇ・・・。

生まれたずい虫が、でかくなって稲の茎をムシャ ちょうど夏の今時分になぁ、 田植えのころに

ム シャ 食い荒らすんや。

正 古、 食われた稲は、どうなると思う?」

> 「そりゃあ、 大きゅうならんと 枯れてしまうや

ろなぁ」

「そうや…、それに、そのまんまにしておい た 5

ずい虫が蛾になって卵を産む。そんで、 がでるころに また、稲の中に食い込 んで 稲 の 枯

らしてしまう。ますます米が、とれぇへんよう

になってしまうんや・・・。」

正吉は、

<u>\_\_\_\_</u> ーん:°」

بح 言いながら、昼間、 田んぼで見た白い小さな

虫を思いだしてい

あれ 「そんならとうちゃん、 が、 ずい虫かぁ… ひえぬきするみてえに

ずい虫もとったらええやねぇかぁ。 わし、今日

なぁ、 田んぼで、ずい虫を見たでぇ。」

声がした。ふりむくと そう言う正吉の後ろで 皿 の ほ 上に塩をふったキュ つほっほ っ…と笑

ウリをのせて、かあちゃんが立っていた。

「正吉、おめえなぁ、イネがどれくれぇ

うわっとるか しっとるかぁ?」

正吉の顔をのぞきこんだ。

か

あちゃ

んが、

にこにこしながら

い出した正吉は、少し口をとがらせて へへへっひえぬきさえも うんざりしていた自分を 思

と苦笑いした。

とうちゃんは、キュウリを手にとりながら

を作るやろ。そのたいまつの火に蛾やずい虫が「だからなぁ、正吉、虫送りのときに「たいまつ

寄ってきて焼け死ぬんや。

びき寄せ 虫退治をする…。虫送りにはなぁ、たいまつもって 田んぼの中を歩いて 虫をお

という気持ちがこめられているんやでぇ。」村のもんたぁの「少しでも「米がようけとりてぇ…

とうちゃんは、正吉の顔を じっと見て、わかっ

ウリを「ほれっ。」と言って正吉のほうに「差したか?という顔をした。そして、もっていたキュ

出した。

正吉は、もらったキュウリをカリッと小気味

よい音をたてていじった。

そなあー。」と 大人びた声を出した。 をうるおしていく。それが、昼間流した汗を思い出させ、遊ぶことばかり考えていた自分が、何だ出させ、遊ぶことばかり考えていた自分が、何だ出させ、遊ぶことばかり考えていた自分が、何だっなあー。」と 大人びた声を出した。

 $\widehat{\Xi}$ 

デーン デーン、トントントン

デーンデーン、チキチキドン

陽が山にしずむのを「待ちかねたように太鼓や

鉦の音が、村から田へと ひびきわたります。

それに合わせて

送れよー、送れよー、

稲虫 送れよー

いよいよ今日は、虫送りの日です。先頭にはと、かけ声高らかに、行列が進みます。

れた 実盛の人形と、ずい虫の幼虫人形がつづきりが かかげられ、そのうしろから わらで作ら「斉藤別当 平 実盛御上洛」と書かれた長いのぼいよいよ今日は、虫送りの日です。先頭には

ては、 ぞろ たようです。 やすおも しながらついていきます。 そして、笛、 ぞろぞろ、 ニッと笑い合う二人は、 小さなたいまつを持って 太鼓、 田 んぼ道を歩きます。 鉦、 たいまつの 時々、 もう仲なおりをし 顔を見合わ 順 顔をまっ 正 に 吉 ぞろ p

正吉は、たいまつを高く上げ、実盛人形を見上



実盛人形は、りりしくも見え、どこか寂しげにもげました。ゆらゆらと燃える炎に赤く照らされた

見えます。

「実盛さんよぉ、おめえさんは、強いお侍やった

ところを一敵に切られてしまったもんやからんやとなぁ。ほんでも、稲につまづいて倒れた

くやしくって くやしくって 稲を食べるずい

虫になったんやとなぁ。」

正吉は、自分に言い聞かせるように語りかけま

した。

「わしなぁ、自分で作ったわなに 足をひっかけ

てころんでまつたんやわぁ。みっともねえやら

なさけねえやら・・・。

その時になぁ、風になって緑色した稲の海の

く稲の海は、そりゃあ、きれいやった。

飛びまわる夢を見たんや。どこまでも続

上を

今度、風になったときにはなぁ、金色の稲の

海の上を飛びてぇんや。

稲穂が、ずっしりとついた金色の海…。わいなほ

か

るかあ、実盛さん···。」

ふいに肩をたたかれた。ふりむくとやすおが

いまつを 指さしている。

た

集まっていた。ぽとぽとと「焼け死んで落ちていそこには、あかりにつられて「たくさんの虫が

くものもあった。

送れよー 送れよ

稲

虫

送

れよ

人々の願いを込めた歌声をひびかせながら、

燃えるたいまつで 赤くそめられた闇夜の中をぞ

ろぞろと 行列が進みます。

稲虫たちも ついついつられて ぞろぞろ ぞ

ろぞろ…。

夏の夜が、過ぎていきました。 金色の海を飛ぶ夢を ふくらませながら正吉の

## 太鼓を買った池の主

りました。その池には、大蛇や大きな鯉が住んで さいかち塚のお話が言い伝えられていますが、 いたお話や、不思議で恐い血の出る木のお話や、 そのむかし、下池というたいへん大きな池があ ے

むかしむかしのことです。

しとしとと、何日も雨がふり続いていたある日の

「ああぁ、いつまでこの雨がつづくんだろうねぇ。 こんなにふっちゃあ、太鼓の皮がしけちまって、

カビがはえてくらあなぁ。」

重くの 大 垣 しかかってくるような灰色の空を見上げな の 町のはずれにある一軒の太鼓屋の主人は、

> がら、 両腕を組んだまま大きなため息をつきましりょううで

た。

あっという間に夜の闇が広がっていくようでした。ると、ますます通りには人の姿が見えなくなり、 「さぁ、もう店を閉めることにするか。こん どっぷりと雨を吸い込んだ家々に灯がともされ の日に、太鼓を買いにくる者なんかいねぇから

なぁ…。

W

なお話も残っていたのですよ。

けが闇の中から聞こえてきます。 ながめていました。人通りもなく、 主人は、そう言いながら雨にけむる町の通りを ただ雨の音だ

ふと気がつけば、家々の角からもやが 立ちはじ

見え、ひゃーと小さな声を出し、身体をぶるっと め、通りから通りへと流れてきます。 ふるわせました。それがもやであることが 太鼓屋の主人は、一瞬、それが生き物のように わ

ても、何だか不気味に思え、早々と店を閉めてし

か

まいました。

のくらい の時間がたったのでしょうか。

トントントン、トントントン・・・、太鼓屋の主人は、

店の户をたたく音で目がさめました。

「こんな夜中にいったい誰がたずねてきたのだろ

主人は、布団から起き上がり、灯をともしまし

た。

そして、寝巻のまま店の土間におりて戸を五寸ほ

ど開けました。

ていました。

な空気が、 とふり続く雨の音と一緒に、みょうに生あたたか 灯が、さぁーと外にもれると同時に、しとしと すすぅーと店の中に流れこんできまし

た。 老婆が、笠もかぶらずにぬうーと立っておりまし 主人が、そっと外をのぞいてみますと、一人の 雨など気にならぬ様子で

た。

「こんな夜分に申しわけございませんが、 つわけてもらいたいのですが…。」 太鼓を

と言って頭を下げるのでした。

が あるのだろうと主人は思って、店に入るように 雨の中を夜中に太鼓を買いにくるとは、何か訳

言いました。

から中くらいの太鼓、そして大きな太鼓とながめ て行きました。老婆は、うれしそうに小さな太鼓 そして、太鼓が並べてある棚の前に老婆を連 扎

るのです。そして、何より不思議だったのは、 であって、それを草の茎のようなもので えるのですが、白髪のまじった髪は腰 いしわが刻まれ、かなり年をとっているように思 それにしても不思議な老婆でした。顔も手も深 のあたりま 結 んで あ

んなにもずぶぬれだったその長い髪も着物も、 の中では一滴のしずくさえ落ちないのです。

店

どこかなまめかしいその姿に太鼓屋の主人は見

とれていました。

「このいちばん大きい太鼓をくれんかのう。」

老婆の しわ が れた声に、 はっと我にかえった主

人は、

「この太鼓は、この店でいちばん高い太鼓だが、

お 、金のほうは大丈夫だろうねぇ。」

たずねました。

すると老婆はにっと笑って、着物の袂からじゃ

枚と並べはじめました。薄暗い灯の下で金貨はキ

らじゃらと金貨を取り出し、店の床の上に一枚二

ラリキラリと光 っていました。 太鼓 屋の主人 は

で、店のいちばん大きな太鼓を老婆に売ることに お金さえちゃんと払ってもらえれば ت، 配 はな ٧ì の

しました。

かかえて、 老婆は、 うれ 雨の中を帰っていきました。 しそうに その大きな太鼓を軽々と

> 太鼓屋の主人は、老婆が置いていった金貨を手 j, 灯の下で何気なく見てみました。その瞬

間だに取

「ああぁ ) | |-

と叫び声をあげてしまいました。手の中にある

は金貨ではなく貝殻だったのです。

「だまされたぁ ا ر

と叫ぶと同時 に 雨 の なか へ飛び出して老婆の後を

追 ري ري かけました。

「待てえいるる」 がふる闇の中に老婆の後ろ姿を見つけると

, \_ \_

たまりをはねとばしながら一生懸命追いか と声を張り上げ、 ばしゃばしゃと道にたまっ けまし た水

た。

るように走っていくのです。その速いこと速いこ げることもなく、 けれども不思議なことに老婆は、 するするう、するするう、 水しぶきをあ と 滑べ



鼓をか 婆は、まだ息の荒い主人のほうを振り返ると、 ぼうと生い茂る下池とよばれる池の淵でした。 の中にするするうと消えていきました。 の恐さに腰が 何が p っとのことで追 何だかわからない太鼓屋の主人は、 かえたまま、 ぬけたようになって、その場にへな にっと笑って、そのまま、 いついたところは、 草がぼ あまり 太 池 老 う

そのころからでしょうか。くもりの日や雨ふりになると、下池のあたりから、デーンデーン、デンデン…と太鼓の音が聞こえてくるのでした。たたいて遊んでござるにぃ…と言う人もあれば、たなの音が聞こえるで大雨になるかもしれんなあ…と空を見上げる人もあったとか…。

なとしゃがみ込んでしまいました。

### 平池の四季

「ツボどん! ツボどん! おひがんまいりしよ

まい

か

き、そんで、わしゃようまいらんわいな」「カラスという黒鳥が、足をつっつき、目をつつ

と、大場村の康則とあつし、それにゆか子と知加そうな歌声が聞こえてきます。声のする方を見る春のおひがんのある日のこと、田んぼから楽し

小学校五年生の康則とあつしは大のなかよし。がどろんこになって何かを探しているのでした。

そして同級生のゆか子と、康則の妹で一年生の知

だら、21)日くは、生しごいらりごはら加……四人はいつもいっしょです。

せん。おひがんのごちそうにと、タニシを取りにでも、今日の四人は、遊んでいるのではありま

ゃ

ってきたのでした。

ゲー! タニシがごちそう?」

のこと、取ることだっていやかもしれません。け今の子ども達だったら、食べることはもちろん

れるものは何でもごちそうだったのです。れど、食べる物の少なかったこのころは、食べら

「ごっつぉういっぺぇ取ってって、母ちゃんにもっ

た。春とはいってもまだ寒いのに、みんな元気いっ四人は、そう考えながらタニシを取っていまし

てったろ」

ぱいです。た。春とはいってもまだ寒いのに、みんな元気いっ

てきました。んどん取れていたタニシの姿が、見あたらなくなっんどん取れていたタニシの姿が、見あたらなくなっ二時間ほど取ったでしょうか。さっきまではど

まいか」 「ツボどん! ツボどん! おひがんまいりしよ

「カラスという黒鳥が、足をつっつき、目をつつ

き、そんではようまいらんわいな」

です。 れ落ちてしまいました。 すべらせて、あつしの方にぶ 知 加 二人のザル が 歌い ながらとび の中の タニシが、 は ね つかってしまった たとき、どろで足を ほとんどこ

ル んたくさんのタニシが入ってい に まだ一年生で、 しんけんに取っていたあつしのザルには、 は、 そんなに入ってい 遊びながら取 なか っ つ たでしょ たか て , ŧ た う。 L 知 11 加 ŧ た の ٤: 世 ザ

「 あ 「しょうが つ、 さっさと拾 落ってまった ね えな V あ。 はじ Ď 知 加 た は 知 ちい 加 せえもんな。」

もほとんどなくなってくると、

あつしの顔色が

ちにタニシ

で

V

っ

ぱ

いに

なり、

落ち

ているタニシ

って

いな

か

っ

た

はず

o の

知

加

の

ザ

ルがみるみるう

てひ

ろい

はじめたあつ

しですが、少しし



わりました。

知 加! これ は、 おれのやぞ」

v つもはやさしいあつしなのに、どうしたこと

でし ょう。

だいたいの家がそうであったように、あつしの

家でも花子という名前のやぎを飼っていました。

さやりはたいへんですが、あつしはやぎが大好き

えさやりはあつしの仕事でした。朝と夕方のえ

でしたので、 毎日欠かしたことはありません。

ところが、きのうにかぎってうっかり忘れてし

まい、

「花子が、どんだけはらすかしとったか、よう考

えてみい」

と、お母さんにこってりしかられてしまいました。

そのうえ、今日はお母さんの誕生日です。

知 加は康則の妹で、 小さい時からいっしょに遊

> でした。だから、いつもだったらこんな事ぐらい んでいたので、あつしにとって、本当の妹のよう

ではおこらないでしょう。

ちがいます。 けれど今日のタニシ取りは、 お母さんへの『名誉ばん ر ب つもの遊びとは か い \_\_

『誕生日のプレゼント』の意味があったので、ホホヒヒュラロ た

ح

くさん取らなければなりませんでした。

すがのあつしもがまんができません。 げで、半分くらいになったのでは?」と思うとさ あんなにがんばって取ったのに、「知 おもわず知 加 の お か

加にどなってしまったのでした。

あつしの大声に、 康則とゆか子がかけよってき

ました。

「どうしたんや?」

「なに おこっとんの?」

と口々に言います。

あつしの説明でようやくわけのわかった二人で

母さんの誕生日の事は言わなかったので、すが、あつしが夕べのやぎのえさやりの事や、

お

「そんなことぐれぇ、ええがや」

「ちょっとぐらい、知加ちゃんに、やりゃあいい

þś

と、あつしをせめました。

二人に言われて、よけいに頭にきたあつしは、

「そんなら、もうええわ」

やっとのことでそれだけ言うと、こぼれてきそ

うな涙をこらえて、さっさと家に帰ってしまいま

した

康則は、あつしの後ろ姿を目でおいながら、

「なんや、あいつー。こっちこそもうええわ」

と、つぶやきました。

楽しかったタニシ取りは、そこでおしまいになっ

てしまいました。

学校が一週間の田植え休みに入っても、仲直りの本当はみんな、前のように楽しく遊びたいのに、

きっかけがつかめません。

夏も過ぎ、子ども達が泳いだり、ハスの実取り

た。

をしていた川も、

V

つのまにか秋になって

まし

と、 はヒシ取りでにぎわいます。 この実の色が茶色っぽくなってくると、 p 葉の下に黄緑色の が て、 水面に浮か ぶ ヒ つの の シの葉が ある実をつけま 深 V 緑 池や川 に なる

食べだしたらもうとまりません。た。栗の実のような味がしてとてもおいしいので、変なので、でばぼうちょうでわって食べていまし変なのではほうりは皮がかたくて、皮をむくのも大くので、鬼ビシ)は皮がかたくて、皮をむくのも大

音が聞こえてくるのです。本当は鬼ビシなのに鬼と、夜になってもあちこちの家から鬼ベシをわる

ベシというのは、わる時に「ベシ、ベシ」と音が

するからかもしれませんね。

うな道具でひっかけて取ったりしましたが、それ岸の近くにあるヒシの実は、くまでの大きいよ

以外は舟を使うしかありませんでした。

今で

は舟をもっている家は少なくなりましたが、

という名前からわかるように、このあたりは池ば当時はどこの家でも舟をもっていました。『池辺』

かりだったからです。

でも運んだものです。ですからとうぜん康則の家舟で水路を通って、池から池へとお米や、牛ま

にもあつしの家にも舟はありました。

は

家のうらを流

**∤**(

てい

る水路の岸のくいに、

太いつなでむすびつけてありました。

春のタニシ取りの日以来、みんなの心にポッカ

リ穴があいたようで、遊んでいても楽しくありま

せん。

知加はおさないなりに、あつしをおこらせた原

因が自分にもあるとわかっていたので、自分の手

シの実をあつしにあげて、

仲直りした

いと思いました。

で取ったヒ

で、子ども達だけで舟に乗るのはまだ心配です。けれど、知加は小さいうえに泳ぎがにがてなの

回だけ特別に、知加をヒシ取りにつれて行くこと知かの気持ちがよくわかる康則とゆか子は、今

にしました。

な舟ならもう一人前にあやつれます。 康則は体が大きくしっかりしているので、小さ

さあ、いよいよ出発です。

康則 に乗せてもらうのは初めてですが、舟に乗

た。 ることが 大好きな知加は、大喜びで歌い出しまし

「がん、 が ん、どこへいく?」

「下池にヒシ取りに」 三人を乗せた舟がヒシの実のある所まで近づい

す。

た時、

とつぜんハチが、

康則のうでをさしたので

「いてっ!」

康則 しまい、その場にうずくまりました。 は、痛さのあまり、 かじとりぼうをはなして

いったい何がおこったのか わからないゆか子と

知 加 は、

「やっちゃん、 どうしたの?」

「兄ちゃん」

と康則のほうに身を乗り出しました。 急に二人が 動いたため に 舟が ゅ 1 よろけた

加は川にまっさかさま……

「キャー、 知 加ちゃん、 知 加ちゃん! だれかー、

だれ ゅ か 子が叫ぶと同時に、 か たすけてー」

۴

ブンッと音がしまし

た。

た。 です。だんだん顔が水面の下へ入ってしまうこと 知 け 加 は水面 11 ど知 加 から顔を出そうと必死にもがきまし はあ わてているうえに泳ぎもへた

が多くなりました。

そのときしずみかけた知加をだいて川面に顔を 二人は舟の上で知 加 の名前を呼ぶばかりです。

見せたのは、なんとあつしではありませ W か。

ほっとしたゆか子は、 あ つ L 。 の 助 けをかりて 知

加を舟に引き上げながら、

「あっちゃん、なんで」とつぶやきました。

に元気になりました。もう一度、ゆか子が 体は少し冷たくなっていましたが、知 加はすぐ

「あっちゃん、 なんでここにいるん?」

と聞くと、

「ヒシ取りに来たんや。 そしたら知 加の歌が聞こ

えたで」

あつしは照れたように答えました。

横から痛いうでをおさえながら、

「あっちゃん、大蛇様みたいやなー」

と康則が言うと、 すかさずゆか子が

> 「そしたら、知加ちゃんは、 さよちゃんやね」

「うん、知 加も知 っとるよ。 あっちの下池の大蛇

様の話……。

やさしい大蛇様が、 さよちゃ んを助けたり、

村

の人を助けたりしたん やね

三人は、あつしに感謝しながら言いました。

それからみんなは、ひとしきり『下池の大蛇様』

の話に花を咲かせました。

仲直りしたかった者どうしが、 こうしてどちらかがあやまるというのではなく、 昨日までのさみし

V 思いを忘れていきました。

今は平池 は埋め立てられて、その光景は見られ

大きなあみをしかけて魚をとる日がありました。

なくなってしまいましたが、当時は一年に二回、

ていたので、 今日はその魚とりの日です。 漁は魚屋さんであるゆか子の家に依 平池 は村 が からより

頼しました。

で分けあいました。 は、魚屋さんのお礼で、 上げました。 つかってこぐ二そうの舟と、八人ほどの人で引き のやり方はそこ引きあみというもので、ろを たくさんの魚がとれ、 残りの半分を村の人たち その魚の半分

らいにやってきました。 あつしや康則たちも、 大きな鍋をもって、 魚を

ゅ か ・子は、 早くから来ていました。

も

ゆか子にうながされて行ってみると、ちょうど引 「おそいよー、はよこやー」

き上げるところでした。 「えんやこらしょ、えんやこらしょ」

れます。 V Ð v のよい かけ声とともに、 あみが引き上げら

るく、 今日も、 池も喜んでいるようでした。 大 漁で 、した。 青空の下で、 どの顔も明

> 一がーん が | ん が しん どこへいく

さきのやつ あとのやつ あとになれ さきになれ

か ぎになれ 竿にな **∤**(

ュ

Ł ユ

さい。 たガンの群れも見られなくなってしまいまし ます。そのため、十二月になると決まって来てい こえてきませんか。 が、今では埋め立てられ、 らぞうりをひっかけ飛び出していったものです。 かすれかすれの雁の声が聞こえると、大急ぎでわ てしまいましたが、 あ ゅ このように村の人たちにとって大切な池でした **う** か子も知 ガンの声やヒシ取りの歓声が、かすか したちの 加も「ヒ 思い そっと耳をすましてみてくだ 出のつまった平池 ル 平東の 団地 ル になっ ヒュル」と、 は なくなっ に開 てい

#### 作され ع ま

揖斐川の水があふれ宝暦三年八月十五日 日 のことや っった。

どろ水がすごい いきお いでおしよせ てきよった。

11

だ

して

堤防

がきれ

た

んや。

そ ŋ p あこ わ か つ たそうじゃ・・・・・。

木にし でねていたおっかさん 池 辺 が 村 4 の うい 権 作 て、 ح っ やっと助 つ は、家とい あ W と娘 か っ のま っ た L W つ ょ は、 p が に 流 か され 病気 ŧ の

とっ てしもうて、 つあ W とまつ 死んでしまっ は、 えろう悲しんでな……。 たんじ やの

ると、 か この 水 が ようきれるんや。 へん Ŋ か んで、 の 堤 防 は、 週 大雨 間 堤防 も家 が に が ፈ、 っ かえ 切 れると、 て 川 1 W の 水が の や。 な か . ኔ な え 畑

も家も、 幕で の命令で薩摩 なんも か もどろ水 (今の鹿児島県) に つ か っ て L のおさむら ŧ <u>ء</u> َ

> なおしにきてくださっ て う。

v さん

が、

川

の

水がふえても堤防がきれんように、

遠くから長いことかかってきてくださってな。

つぎの年の二月のことやった……。

平 田 **靱負公という人が** 何 人 も の お さむ 5 v

¥

んをつれて、 平 田 靭負さまは、 この池 治水ぶぎょうというえら 辺村に つきなさった W や。

人

で、 そうさなあ、 学校なら校長先生くらいえら V

人かなあ。 大巻の豪農鬼頭平内

住んでもらうところは、

まの家をなおしたん

や。

おむかえしたんじゃ。 のことを、 つ あんとまつも でむ かえ まるで神さまか の 池 ぉ 辺 の つ 村 て な。 人たちの 仏さまのように思って、 薩 摩 Ó な お か さむ に、 5 権 作 さん とっ

ŧ つ 薩 摩の て堤防をなおしはじめたんや おさむらい さん たち は、 が な 礼 二ケ月もす な V クワ

بخ

ると、だんだんやせてきたそうや。

だがな、村人は幕府から

「薩摩のさむらいに食べ物をやってはいけない」

「品物はお金をもらって売れ」

「安く売ってはならない」

と、きびしく言われていたんじゃ。

その命令を聞かんもんは、幕府からおしかりをう

けることになるんや。

あるばんのこと、権作とっつあんとまつは、ご

はんを食べながらこんな話をはじめたんや。

「おとっつあん、薩摩のおさむらいさんたちは、

ずしか食べれず、だんだんやせてきなさったん 一日中はたらいて、おみそしると、少しのおか

では

まつは、 しんぱいそうに聞いたんや。

すると、とっつあんが

「工事のお金がたくさんかかるんで、けんやくさ

れとるんや」

と答えたそうや。

「おとっつあん、 まつはしばらく考えて うちの畑で取れたやさいを食べ

てもらったら、どうやろ」

と、けっしんしたように言ったんや。 「まつ、やさいをおさむらいさんに売りに行くの

か

とっつあんは、ちょっとこわい顔をしてのう。

まつは、きっぱり言ったそうや

「この村のためにはたらいてくれる、さつまのお さむらいさんから、 お金は取れませ ん \_

とな。

それを聞いたおとっつあんは、よろこんで言っ

た。

「まつよ、よく言った。 たら、そのお礼にこちらもよくしてあげること 人間はな、よくしてもらっ

#### が大事なんや」

とおいてきたらどうやろ」 幕府の役人におしかりをうけるから、夜にそっ「おとっつあん、昼にやさいを持って行ったら、

からんな」「うん。うん。それなら、だれが持ってきたかわまつが声をひそめて言うと、とっつあんも、

と賛成してくれたんや。

「こけやせがあっとんから、わいがこっきたとかの下人の長左衛門を呼んで聞いたんや。おいたんじゃ。岩七はふしぎに思って、もう一人あったんじゃ。岩七はふしぎに思って、もう一人ないが置いていると、つぎの朝早く、鞠負さまの下人の岩七が

なかろかい(いいや。おれは買わないから、鬼頭さまかな)」「うんにゃ。おやこたこちなかで、鬼頭さまじゃ

(ここにやさいがあるが、おまえが買ってきたのか)」



さっそく二人は、鬼頭さまのところへ行って聞

いたけどな、わからなんだ。

鬼頭さまは

「それは、神さまか 仏さまが、 薩摩のおさむらい

さんたちが が W ば っているのを、 みとめてくだ

きなさいな。 さったんやろう。 わたしはだれにも言いませんから」 ありがたくちょうだいしてお

とおっしゃったそうや。

でもな、 の長 左衛門は ふあんそうに

「幕府の役人に見ん からんどかい (幕府の役人に見つ

からないだろうか) ]

と岩七に聞い た んや わ。 岩七 は

「もっきた人が わからんにゃ、幕府の役人やって

ん、 どげんしょうもなかろなあ(もって来た人がわ

からなければ、いくら幕府の役人でもしかたがあるまい)」

と、 すぐに料理 してしまったと。

食事をするとき岩七は、主人の靭負さまにだけ

はこのことを知らせたんや。

靭負さまはこの 話を聞くとな、 感謝の気持ちで

っぱいになられたそうや。

V > その 日 か 5 治水工事が お わるまで、 やさい ゃ

くだも の、 ときには もちやだんごまでとどけら

れたということや。

あるばんのことやっ た。

靱負さまが夜おそくまで仕事をし てい たときの

ことや、 外で何か物音がしたんや。

帰ろうとするまつの顔が月にてらされて見えたん ふしぎに思って外を見るとな、やさいを置いて

やと。

いうことや。 靭負さまは心の中で手をあわせて感謝され たと

やった。 治 水工事が 靱負さまはけらいもつれずに、 もうすぐ終わるというある 一人で権 日

作とまつの家に行かれてのう。

仕事から帰ってきた権作とっつあんとまつは、とだけ書いて、権作の家においていかれたんや。紙に一両のお金をつつみ、「仏さまのおかえし」

すぐにわかったそうや。ぱな字を見て、治水ぶぎょうの平田鞠負さまやと、名前は書いてないんやが、すみで書かれたりっ紙のつつみを見つけてな。

わせておがんだんやと。さまの家のほうを向いてな、いつまでも両手を合とっつあんとまつは、平田靭負さまのいる鬼頭

なんともええ話やわな……。

「血涙薩摩莪士物語」を参考にさせていただきました。

# 平田公の三つどんぶり

んぶり』です。た平田靱負公がいつも使っていたという『三つどまってあります。それは宝暦治水の総奉行であった場のAさん宅には代々伝わる宝物が大切にし

うに伝え聞いています。Aさんはこの『三つどんぶり』について次のよ

平田公はうどんが大好きであったと言います。 ではなかったでしょうか。 平田公はうどんが大好きであったと言います。 ではなかったがと思われます。 ではなかったがと思われます。 ではなかったがと思われます。 ではなかったがと思われます。 ではなかったがと思われます。 ではなかったでしょうか。

治水工事も宝暦五年四月六日までに幕府側の検

と冷静に最後を書き結んでいます。しかし、その事工事が終わり、この上なく喜ばしいことです。」こには自分の苦労や活躍には一言もふれず、「無鹿児島への工事完了の報告書を書き終えます。そ査がすべて終わり、平田公は五月二十四日には





です。 多くの犠牲者を出 よく切腹しようと 任をとり、 の覚悟があったの W したことなどの責 の費用を使 いさぎ V

ۍ،

の内にはたくさ

す。 えた翌日のことで 報 平田公は次の 告書を書き終

し里も今更名残りにて立ちぞわずらふ して切腹し果てていたといいます。

L

辞せいの

和力

小歌を残

美濃の大牧

住みなれ

鬼頭家 どんぶり』と名前がつい こう に して平田公が最後まで愛用したどんぶりが 遺品いなん とし て残 りまし ているように、 た。 そ 11 に もともと は 『三っ

> に伝 紛失して残っていないそうです。 三つでそろいの器であったようです。そのうちひ その後、 ひとつは黒田家に伝わりました。鬼頭家のも とつは鬼頭家に、ひとつは大垣の戸田家に、 わっているのですが、他の二つは破損したり、 鬼頭家から嫁入りした人によりAさん宅 のは もう

さわやかに散った平田公の面影を残していくので ら、これからもAさん宅に家宝として伝えられ、 下の台の部分でできている厚手のどんぶりは、そ の不思議な形と異国を思わせる色あい こよう。 コバルトブルーをした上の椀の部分と、茶色で を保ちなが

# おたどさんの雨ごい

ねえ、 みんな、 おたどさんって知ってるかい。

ぼくは三年前、多度神社のある多度の町から、

この池辺に引っ越してきたんだ。

ちょっと前までは、おたどさんと、 ぼくの知 っ

てる多度神社がおんなじだなんて知らなかったん

だよ。

「へえ、おたどさんって養老の上多度のことじゃ お母さんが近所のおばさんと話をしてるとき、

なかった

の \_\_

なんていってたから、 お母さんも知らなかったみ

たいだよ。

養老の図書館でビデオを見てたら、お母さんが

ぶ厚い本をもってきて

「多度神社の雨ごいのことが書いてあるよ。」

て、ぼくの背中をつついた。

つ あとでお母さんがその本を見せてくれたけど、

ぼくの知らない漢字がいっぱいあって、

むつかし

いことが書いてあるから、

お母さんがぼくに

わか

るように話してくれたんだ。

「何日も雨がふらないことを日でりというんだっ その本にはこんなことが書いてあったよ。

て。日でりがつづくと、米や野菜がかれてしまっ

お百姓さんはこまってしまって、神さまに — 雨

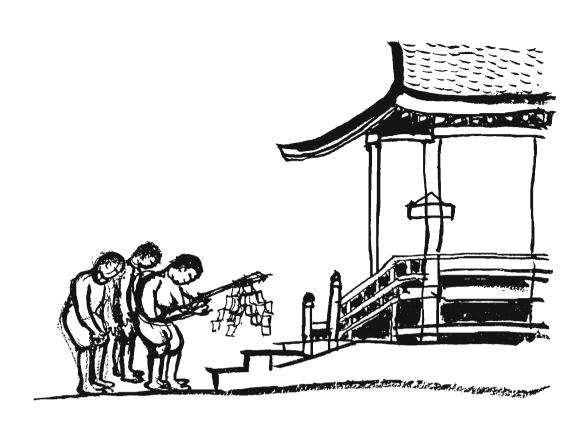
て、とれなくなくなってしまうんだよ。だから

をふらしてください。』って、おねがいに行く んだ。そのことを雨ごいっていうんだよ。」

養老の人たちは雨がふらないと、多度神社へ雨

ごいに行ったんだって。

多度神社までできるだけ早く走っていって、神さ が 速 車のないむかしのことだから、 い、げんきな人を何人もえらぶん 村では、 だ。 走るの そして



よ。まに雨がふりますようにって、おいのりするんだ

神社で雨ごいの御弊をもらった人は、御弊をもっりかたがちょっとかわってておもしろいんだ。うおふだをもらって帰ってくるのさ。でもその帰おいのりが終わったら、神主さんから御弊とい

神社で雨ごいの御弊をもらった人は、御弊をもって走るんだけれど、二人から三人いっしょに走る をバトンタッチして、また次の人が走るんだ。養をバトンタッチして、また次の人が走るんだ。一人で走るのはさみしいからかなあ。 するんだって。

んが、おたどさんの話をぼくに聞かせてくれたんある日のこと、お母さんの知り合いのおじいさ

だよ。

「そうさなあ、昔のことやではっきりもおぼえと らんが、昭和十年くらいまでやったかなあ。

あ

ったんじゃ。

お

いのりがかなっておしめりがあるとな、そ

いてきた。』なんぞと言われるくらいききめが

の大巻でも雨ごいのおいのりがあったなも。

ご拝殿にこもってな、こんな歌を歌ったもんさ をもらいに行っとるあいだ、村人は氏神さんの 村の代表さんが、おたどさんへ雨ごいの御弊

‡, りゃ あ村人は喜んで、お礼まいりに行ったもん

わしは電車でおたどさんに行ったなも。今は

自動車で行くようになったで。」

ぼくが多度に住んでるときは、

おばあさんとよ

池辺に来てからは、お正月のはつもうでしか行 く神社ヘシイの実をひろいにいっ たんだけれど、

の家では、 なくなってしまったんだ。それなのにおじいさん 一年に何回も行くんだって。ぼくはど

うしてか聞いてみた。

「このへんは、初もうでばっかりやあらへん。い までも田植えがすむとな、 田植えのお礼まい

それに婦人会の多度講もあるでなっ

それになあ、 この大巻にも多度神社はあるん 雨ごいかけたで

なぁ。

夕だち雨なと

雨

おく

地雨なと……

が、 た いこをデンデンならしてうたったもんさな。 御弊は金ペイ、銀ペイ、黒ヘイがあったんじゃ 金ペイなんぞは 『御弊といっしょに雨がつ

じゃよ。(神明神社にまつってあり

ます。) に おまつりをするんじゃが、 大水になっても、 の もらっとるお礼に、毎年九月十日に に守ってもらっとるんじゃ。守って 青年団みたいなもんよ。 は若連中ちゅうのがあってな、 この神社のばあいはな、 堤 防が 切 揖斐川が そのころ 11 W よう

って、なつかしそうに話してくれたんやみになったんじゃよ。」とみだったんじゃよ。」をしみのなかった昔のことじゃ、ま楽しみのなかった昔のことじゃ、ま

「おたどさんとなまず池」の話を読んぼくは、先生がふるさとタイムで

だ。



巻からおたどさんにおまいりに行ったがぶじ終わりますように」って、大まのおさむらいさんたちも、「工事まのおさむらいさんたちも、「工事でくれたことを思い出したよ。

かって、ちょっぴりうれしくなった。たどさんを大事にしていることがわぼくは、池辺の人がこんなにもお

## おもどり地蔵さん

きます。ふと、胸の中を不安な気持ちがよぎりま空を見上げると灰色の雲が西へ西へと流れてい

した。

た大 に 根 つ 6 も人が亡くなることはありませんでしたが、 か 池辺 古 ほ Ď, 地 雨 W はもちろんのこと、笠郷あたりまでが水に の の の 海のようになってしまったのです。 堤 せ 一ヶ月前 防 V が で牧 切 **∤**( のお盆のころ、 田 てしまったのです。 川 の 水が あふ れて、 台風がもたらし 土地 とうとう 幸い の低 少

いのかもわからずに、ただ立ちつくすばかりでしいありさまに人々は茫然とし、何をどうしたらいしずつ水が引いて行くに連れて、そのむごたらし

た。

降りしきる雨を見上げながら、そのときのことをみこんで頭をかかえ泣いている人…、庵主さまは、くうなだれる人、田んぼのあったあたりにしゃがが傾き、泥にまみれたタンスや畳を前にして力な家を流されてしまった人、家が残っていても柱

あれから一カ月、人々は、助け合いながら何と

思い出していました。

か立ち直ろうとしています。

弥陀仏、南無阿弥陀仏とくりかえしました。みゃょうをい…――庵主さまは、数珠を握りしめ、南無阿ない…――もう二度とあの恐ろしい大水にはあいたく――も

ていき、その途中にある地蔵さまの前に立つと、そして、雨も気にせず、本堂の前の階段を降り

「どうか村の人たちをお守りください。どんなこ とがあっても、 こえる村になるように、おみちびきくださいま 以前のように明るい笑い声が 闡

流 ぬ 川の水が、不気味な音をたてながら、道路の際ま で増えていることに気がついた庵主さまは、空を 新しい赤い帽子と前だれをかけた地蔵さまの眼が、 まの額に、庵主さまが、そっと手をそえられると、 村人たちの苦しみは、身をもってご存じの地蔵さ 沈んでしまわれ、無惨な姿になられたのでした。 *ኔ*‹ そう言って手を合わせました。 不安が押し寄せてくるのをとめることができま れていく黒い っとやさしくほほえまれたような気がしました。 んでした。 この地蔵さまも、あの大水のときには泥の海に かし、その地蔵さまから道路をへだてた五三 雨 雲のように、胸 の中を言い知 れ

せ



まし 強されたとは ŧ ました。人々は先の大水の恐怖におののきながら に ますます激しくなり、 い に あずけ、 な 手際よく家の片付けをすませ、子どもを親戚しなせる た。 耐えられるかどうか不安がつのるばかりでし んということでしょう。 けれども、 台風 ないえ、 の通 牧 あ りすぎるのをじっとまっ 再び台風 の 田 川の激しく流れる水の勢 切 れた堤防が、いくら補 雨はやむこともなく がこの 地をおそ

した。人たちをおまもりくださるようにと、お祈りしま人たちをおまもりくださるようにと、お祈りしまを主さまは、地蔵さまに手を合わせながら、村

た。

乗り安全な堤防へと避難しました。 لح 1) が 激 舟の上から、 が知らされました。人々は用意していた小 か しく鳴り響き、 その祈りもむなしく、 沈みゆく地蔵さまに向かって必ず、 根古地の仮堤が 真夜中に半鐘 庵主さまは、 再び 切 11 舟に たこ

もとのような平和な村にもどれるようにと、お祈

りしました。

きました。それでも日がたつうちに少しずいませんでした。それでも日がたつうちに少しずつませんでした。それでも日がたつうちに少しずつっただだ立ちつくすばかりで、何をする力も湧きもがればいなけて人々は、目の前に広がる泥の海に、

「あれ…? 確か、ここにあった地蔵さまの社が死骸などがたまって、あわれなものでした。した。水につかった寺は、流れてきた木や動物のした。水につかった寺は、流れてきた木や動物の産主さまも、村の人と一緒に寺へもどってみま

見当たらぬぞ…」

れらしいものにあたりません。を主さまが竹ざおで水の中を探ってみても、そ

は仕方がないと、庵主さまがため息をもらされた――ああ…流されてしまわれたのかぁ…この水で

とき

「おおぉーい! 庵主さまぁー」

三川は水に沈んでいるので何処が川なのかわから声で庵主さまを呼ぶ声がします。(といっても五と、五三川をはさんだとなりの村の方から大きな

庵主さまあ

1

ここにあるお地蔵さんは、

おめ

ない

のですが…。)

えさんとこの地蔵さんやねぇかぁー」

こへ行きますと、なるほど確かに庵主さまの寺のています。えっ!(まさか…、あわてて小舟でそ隣の村の人が、舟の上で叫びながら何かを指さし

ŧ 赤 地蔵さまです。 あ、ここに流 帽子と前だ 半分ほど水 れついておられたんですかぁ。 れには見覚えがあります。「まぁ、 に つ か 2 て V ますが ょ

それにしても、どうしてその場所に流されていかった。よかった。」

っ

ことがうれしくて、すぐに忘れてしまいま ですが、その時は、大切な地蔵さまが見つか いか…と、庵主さまは、一瞬不思議な気が るなら、もっと下のほうへ流れていくもの るのです。 る場所で、 たのでしょうか。そこは、釜段の鷹屋敷と呼ば 「水がひいたら、 しかも、 その土地はほかに比べて高くなっ ちゃあんと、 お寺の真向かいです。 もとの場所 流 س に L され もど った て た は 11 な の

とや地蔵さまが見つかったことに感謝をして手を庵主さまは、みんなが無事に生きていられるこしてあげますからね・・・」

す。 お社 子を見にいきますと…、なんと、あの地蔵さまが 合わせました。 と水がひきはじめたころ、庵主さまが、お寺の様 ところが、 庵主さまは、 に入られてもとの場 不思議なことが 村のだれかが運んでくれたのか 所にもどられてい おきたのです。 た ゃ ので っ

とたずねまわりましたが、みんな首をふるばか

ŋ

です。

と温かい思いと小さな希望の灯をともしてくれた事は、水害で打ちのめされた人々の心にほんのりが、そう思いました。そして、この不思議な出来のだ…と、庵主さまはもちろんのこと、村の誰も地蔵さまが、ご自分でお寺にもどってこられた

のでした。

地蔵さまへの感謝の気持ちがこめられているのでの前の穏やかな暮らしに一日も早くもどれるようの前の穏やかな暮らしに一日も早くもどれるようのがなないと、そのためには一人一人が自分のにという思いと、そのためには一人一人が自分のにという地蔵さん…、村の人の中には、そっとおもどり地蔵さん…、村の人の中には、そっと

## 大代村の嫁取り

#### お地蔵様のお祝い

うのが普通になっていますが、昔はどこでも自分結婚式は、今でこそ結婚式場やホテルでおこな

こなわれた結婚式のお話です。これからのお話は、三十年ほど前の大代村でお

の家でおこなったものです。

に来る祝い客で、とてもにぎやかでした。んにやってきました。桑治郎の家はひっきりなし村の桑治郎の家に、となり村からおみよがお嫁さ秋の取り入れも終わったころのことです。大代

月もろともに 入り潮の 波の淡路の島影や高砂や このうら船に 帆をあげて

遠くなるおの 沖こえて はや住之江に 着き

にけり

村人の祝いのうたが家中に響きわたります。 村人の祝いのうたが家中に響きわたります。 でする役に、いつも村があります。 そのおしゃくをする役に、いつも村があたりました。 二人は一番上等の着物をきががあたりました。 二人は一番上等の着物をきががする。

おさよとおかよは、この日のために何回も何回

も練習をしてきました。じょうずに三三九度のお ゃくができた二人は、 ごほうびにたくさんの菓

子をもらいました。

お酒 式 もぶじに終わり、 をつぎにきます。ごちそうを前にしても二 大勢の人が桑治郎とおみよ

人はなかなか食べれません。祝宴は夜まで続きま

に

す。

窓の外では、村の若者たちが、 お地蔵様のお祝

の準備をしています。

今日は大代の桑 治郎が嫁っ子さもらうげな」

「はよー ・みん なで お 祝 いやし

ーは よせ はよせ」

らお や大代村のいろいろな場所のお地蔵様など、 若者たちはにぎやかに、近くの村や遠くの村 地蔵 様 を集めてまわります。 お墓 の六 地蔵 池辺 か 様

> 中 世 まつりの小太鼓までもが集められています。 ん。 のお地蔵様が大集合です。それだけではありま 畑で使うこえたごやむしろ、み、もっこ、

ー お 'n まちがえんよう ちゃんとお地蔵様 に

どこのか 書いたるか」

「書いたる 書いたる」

「おお 白ぼくで書いてきたぞ」

「それに 桑治郎さも地蔵さんの顔は よう知

とるでだいじょうぶや」

「よう桑さもやってきたでなぁー」

「ほや ほや いままでのどーんなお祝いより

ŧ しっと どはでにやったるでなぁー」

「たのしみやなあ」

たんのーするまで

やったるでー」

「はよう 夜にならんかな」

「今日は 秋晴れのええ日や お祝 いには ŧ

てこいや」

「今夜はお月さんもお祝いにござらっせるわ」

ら、日の暮れるのを待っています。村の若者たちは、ふるまわれたお酒を飲みながいったい何が始まるのでしょうか。

なあ なあ よめさんてどっから来るんや」

なんぼなんや」

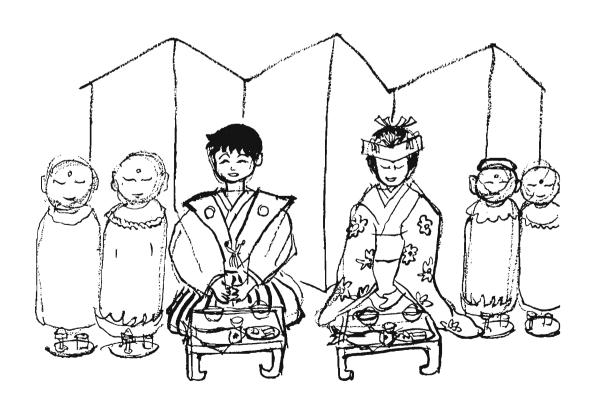
「ああ」はよう、ようさりにならんかなーあ」「でぇじょうぶ、ようさんあつまっとるで」「ほれより」どんだけ地蔵さん集まったんや」

口々に好きな事を言いながら、

騒いでいます。

く祝宴も終わりました。家の者が寝静まると、若よられると、おりや大きなお月様が明るく村をてらすころ、ようや

ゴトン(ゴトン者たちが集まってきました。



ガタガタ ゴロ ゴ D

者たちが引いてきた荷車やリヤカーには、た

くさんのお地蔵 様がのっています。こえたごやお

お地蔵様は桑治郎の家の中に運びこまれ、 し車、大きな川舟まで庭先に持ってきています。 座敷や

廊下に所せましとならべられます。

お 地蔵様もひさしぶりに、 仲間のお地蔵様に会

えてうれしそうです。

『ひさしぶりだったのぅ。今日はよう来てくださっ

た。桑治郎も嫁取りですよ』

ああ 早いとこ赤児の顔が見たいもんですな』

お地蔵様たちもにぎやかに話をしているかのよ

うです。

物 音に気づいた家の人たちは

「ああ お地蔵様がおい わいに来てくだれた。こ

> れで、この家にも赤児が 授かるやろう。よかっ

た よかった。」

と、村の若者たちのさわぎを喜んでいます。

「おーい桑さ は よし にねろや」

「よめごさかわええか . え \_

「ねええや ねなあかんでー」

大きな声で はやしたてています。

ギシ ギシ ギシ ギシ

家が大きくゆれ出しました。

ガターン ギシ ギシ ガターン ギシ

ギシ

をゆり動かしました。 若者たちが、土台に大きな木を『てこ』にして家

ギシ ギシ ギシ ギシ

家の中の二人は驚いてとび起き、 桑治郎はおみ

よの手をひき家の外を見なが

「みんな お祝いに来てくれたんや」

と言うのですが、何が起きたのかわからないおみ

よは、桑治郎にしがみつくだけでした。

「おれたちに、はように赤児がさずかるように、

を連れて来てくれたんや」

と話して聞かせました。

お

)地蔵様

若者たちのにぎやかなお祝いが、終ったのは夜

が明けるころでした。

コケコッコー

と鳴くにわとりまでもが眠そうです。

一番に起きてきた桑治郎のおっかさんは、お地

す。たくさんのお地蔵様にさしあげるためです。蔵様にそなえる『おぶくさん』の用意をしていま

家中の人が、そろってお参りをしています。

「ありがとうごせぇました。ぶじ婚礼もすみまし

くり返されます。

た。これからもよろしゅうおねげぇします。|

おみよは『はやく赤児がさずかりますように』

と、そっとお地蔵様にお願いしました。

に乗せて、それぞれの場所に返しにいかなくてはたくさんのお地蔵様を、荷車・リヤカーに大切

なるのです。もちろん二人だけでは大変なので、なりません。これが、桑治郎やおみよの初仕事と

おとっつぁんとおっかさんも手伝います。

地蔵堂の前では、村の人たちが

「おめでとうさんでした。これで孫の顔がはよう

見れたら おおめでた だなも」

と口々にお祝いをしてくれます。

「おおきになも、こんからも よろしゅうお願い

します」

もちろん返す道中にあう人とも、そんな会話がとおとっさん、おっかさんも大喜びです。

— 51 —

お 地蔵様だけでなく、 集まった舟や太鼓なども、

もとの 場 所に 返 します。

ああ、

ぶじお返しができた」

「ありが 「ありがとうさん。 たい ありが 村の衆\_ 、たい」



仁保の披露宴

若者達にお祝いを

こんな風に、村の

式があったのです。

大代にこんな結婚

三十年ほど前の

おもしろいと思い たなんて、とても される結婚式があっ

蔵様がお祝いをす こうした、 お 地

ませんか。

保や美波では形はやる嫁取りの行事は、こ あ 様 いをしてい のお父さんやお母さんの中にも、 に帰ってきて、 きにはもちろんですが、結婚式場で式をしても夜 まで行われていたそうです。結婚式を家でしたと ったことを忘れないでいきたいと思います。 のお祝いをうけたのです。仁保や美波 なんとも楽しく、 ただいた人たちがいるでしょ は形はやや違いますが、十二、三年前 地区の人たちとたくさんの 他の地区でもありました。 心のこもっ た <u>ኔ</u>、 お地蔵様に 1 あ の人 う。 V の場 お お祝 たち 地 蔵 が

注 ①

注 ② 花婿さんと花嫁さんが一つのさかずきでお酒をそれぞれ三度飲 三三九度のさかずき

三つのさかずきで合計九回飲む

# 大にぎわいの大巻上まつり

ピ 1 Ł ヤ ラ ドンドン

ピ Ì Ł ドン

これからのお みなさんはお祭りが好きですか。 話 は、 昭和十五年から二十年のこ

まれる前のお祭りの話です。おじいさんやおば さんならなつかしく思い出されるかも知れません。 ろのことで、みなさんのお父さんやお母さんが生 あ

せんでした。もちろんテレビやファミコンもあり そのころの日本は戦争中で、物もあまりありま

ません。子どもたちの遊びといえば、女の子はお

さんに教えてもらっては自分で作ったものです。 ラごっこなどでした。 はじきやお手玉で、男の子はコマ回しやチャンバ 遊び道具はお父さんやお母

わらぞうりもよく作りました。

いをやっていました。けれども子どもにはぜいた 娯楽といえば、今尾に劇場があり、 映画やしば

くなことで、つれていってはもらえませんでした。

それでも楽しくまち遠しいことがひとつありま

した。年に何回かのお祭りです。

そのころの大巻は上、寺堤、 仁保、下(美波)

れの部落が別々にお祭りをしたのです。

の

四つの部落に分かれていました。

「おれんたぁの部落が一番のにぎわいやぞ!」

たあもがんばってやるでな」

「いやいや、今年は上には負けておれん。おれん

と、それぞれの部落が自分たちの祭りを盛り上げ

るため、いっしょうけんめいにせりあいました。 そのためか大巻の祭りはもちろんのこと、遠く

は輪ノ内や安八、また今尾や駒野の人たちが集ま

そしてそれぞ

ŋ それはもう大変な人だかりになりました。

たが、 舟に を に はそんなにたくさんのお客は乗れませんので、 船 時 頭 乗るところを渡船 揖斐川 うさん 今尾 が るを渡船場といい、今尾と池辺は渡るのに舟も利用していまし の橋 舟をこいで渡してくれ (昭 和十三年完成) たのです。 はありま た。 の 舟 間

て

V

まし

た。

をいじめる場面では、 物語で、 番人気があったのは、 いじわるなしゅうとばあさんが いつも見物人は大笑いをし 嫁としゅうとの出てくる お さん

も踊りました。 も夜通しおどりあか L ば V のあとは、 したものです。 "大巻音頭"で大人も子ども など

そ 11 ほど人々をひきつけた大巻のお祭りはどん

なようすだったのでしょう。

毎年、

四

月十日と二

またおもしろい

踊

ŋ

が

お

客さんの列ができたほどです。

前広場 十五 日には薩摩義士のお祭りがありました。 に 仮 の 舞台が 作られ、 上の人たちが i 義士 ば

p 浸えない をし まし た。

け 11 < i れました。 6 上 の に で見ている人も大喜びでした。 人たちは、 化 粧をし しば て出てくるの 毎年しばいをくふうしてみせ いでは男の人が女役をして、 ですが しばいの中で とてもこっ ż て

> には 九 月十七日は秋葉 神 社のお祭りです。 ありました。 この 祭り

け りし す。 す。 L 女役 「デンガラカシ」という、 ていました。 V は で、二重三重に取り囲んだ見物人は大笑いを て編み笠にスリコギを包み込むしぐさがこっ たいこに合わせて、右へとんだり左へとんだ 男役と女役が 赤 い長じゅ あり、 ば んで 編ぁ 男役はス み笠を持っ たいこを使った IJ j て踊 ギを 踊 る ので りで



ちんが飾られ、 と横笛のおはやしがありました。十二灯のちょう 「デンデコデン、デーン」と打ちならす大だいこ ありました。 十月十日と、十一日の大巻の神明神社の祭りは、 稲の豊作を祈る「しし舞」 の曲芸

が

祭りも大変に盛り上がりました。 です。高さ三メートルにもなる大きなししが、 にして、右へ行ったり、左へ行ったりして踊 片手に持ちながら一気にかけの ます。三段目は一人の男の人が〝ししがしら〟を み、それを土台にして二段目に二人が立ち上が を大きくあけるたびに見物人の歓声がわきおこり、 しらをかぶって立ちます。 ししを作ります。 うど運動会の組体操のように三段に組 勇気と度胸、根性のいるしし舞でした。それは そのしし舞は普通のものではなく、たいへんな 一段目に三人の男の人が肩を組 六人の男衆は心を一つ ぼり、上でししが ししが大きな口 んで大きな る ちょ 口 ŋ

て を開 た けるのはみんなの厄払いをしていると言われ ので

たに違 落ちるあぶない曲芸です。 の見物人は拍手でたたえたものです。 りまし 灯の た。 ちょ いありません。 うちん 舞は それだ 六人の気が合わなけれ に けに もまさる勇ましい しし舞で骨折をした人もあ 六人衆がそろった姿は、 練習もきっと大変であ 姿で、 ば、 くずれ 大勢 十

祭りは 男衆が着物を着て、 えてしまいましたが、 を持ち、「デンデコデーン」と大だいこを打ち 残念なことに、このしし舞は戦後になって途 して神明神社に集まってきます。 行わ 14 ています。 それぞれが十二灯のちょう 今でも十月十日にはこの 夜になると 四 つ の 部 落 秋 絶だ の

ŧ

す。

その音を聞くと、

にぎやかで楽しかっ

た昔

弾

四 つ

の

たいこがそろうと

「ダダダダ

1

ン

لح

連

が始まり、

夜空に力強

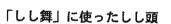
いたいこの音が鳴り響き

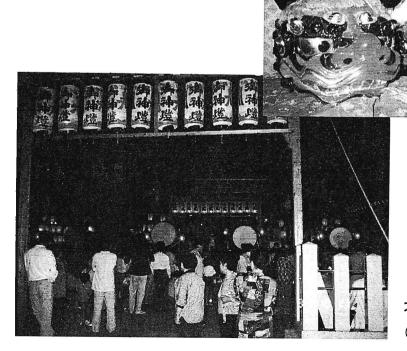
鳴

W

秋祭りの面影がよみがえってきます。

の





大巻祭り (平成6年10月10日)

## 桜色の宝物

ある夏のこと。小学校三年生になる治郎は、夏

休みの自由研究のために、万作じいさんに話を聞

きにやってきました。

治郎は、はじめて万作じいさんと話をします。

張り切ってきたものの、家の中へ入るには勇気が

いりました。

ブロックべいのすき間から家の中をのぞいてい

るのが見えました。学校へ行くときに、たまに池ると、じいさんは、日の当たる部屋で何かしてい

に四手網を仕掛けているのを見ているのですが、

なかなか言葉がでてきません。

「ごめんください。」

少し上げましたが、また仕事の続きをしていて、あまり小さな声でしたので、おじいさんは顔を

治郎が来ていることには気がつきもしません。

「ああ、帰ろうかな、やっぱりはずかしいや。」

と思ったとき、

「何しとんのや、そんなとこで。」

と、おばあさんが声をかけてきました。

「あ、いえ、その・・・。」

と、しどろもどろの治郎が、大きなノートを抱え

ているのを見て、

「何か、うちに用事か。」

「はい、おじいさんに魚つかましのことが聞きた

いんです。」

「おーい、じいさん、この子が用があるって。」

治郎はおばあさんの突然の大きな声に、とても

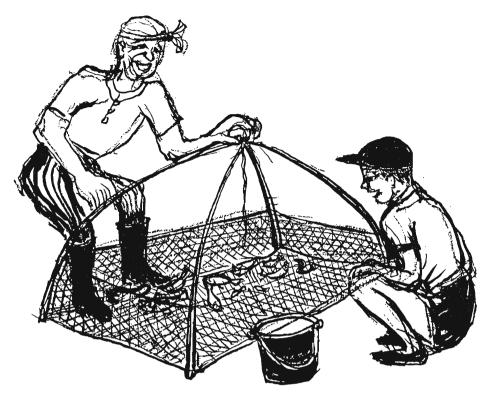
びっくりしました。

「なんや、ぼう、どこの子や」

[.....o]

「何ぞか…。」

|わしでもわかることか。|



と、いっぺんにおじいさんにたずねられて、 い何も言えなくなってしまいました。

するとおばあさんが、

「おじいさん、そうそう、 いろいろ聞いたら、

何

もいえへんがな。」

「おお、わるかったな。」

と、あらためて言われると、治郎はまたまた困っ

てしまいました。でも、思いきって、

「おじいさんはいつも四手網をしかけているけど、 何が、どのくらい捕まるか聞きにきたんです。」

「なんでや。」

「夏休みの自由研究に、池辺の水辺の生き物を調 べているので、聞きにきたんです。」

「なーんや、そんなことか。ハエヤスジエビ、そ れにタナゴとかの小さな魚やな。」

「朝の五時ごろに四手網をしかけてくんやぞ。 んで、八時かそこらに上げにいくんや。」 ほ

と時計を見て、

「まあ…いく時間やな。 ぼうもいくか」

「え、いいんですか。」

と治郎は思わず大きな声で答えていました。

「何やぁ、きゅうに元気になったな。」

と日に焼けた顔をくしゃくしゃにして、おじいさ

W は大きな声で笑いました。

思い出して、耳まで赤くなってしまいました。 治郎は、さっきまでははずか しがっていたのを

四 手網のしかけてあるところは、おじいさんの

家 歩いていく間に、万作じいさんは、昔いたセンパ から五分くらい歩いた大きな池です。そこまで

池に住む小さな生き物について、いっぱい話をし ラのこと、カラス貝のこと、ザリガニのことなど、

ました。

治郎は昔からおじいさんを知っているような気

持ちになりました。

「ぼうは、何て名前やったかな。」

「田中治郎です。」

「なんべん、聞いても忘れてまうわ。 アッ ハ

と、とてもおもしろそうに笑いました。

池に着くと、

「どーれ、ようさん入っとるとええけどなぁ

と、おじいさんは網を引き上げた。

「わあー、入っとる。」

「何ゆうとる、こんだけぐれーで。」

「もっと、捕れるの اً ،

はもっと、はように来いや。 「おお、こんだけぐれーやねえぞ。そうや、 網を入れるときも見 明日

せたるで。

「はい、ぜったい来ます。」

「ぼうはよっぽど魚が好きなんやな。」

「はい、一日中、見とってもあきないよ。」

「おめー勉強もせなあかんぞ。ハァーハハハo」

治郎は

「なんかぼく、おじいさんによぉー笑われるな。」

と思いました。

「今日こんだけぐれー持って帰ってもしょんねえ

で、ぼうにやるわ。」

と、おじいさんは入れ物に入れた魚を全部治郎に

手渡しました。

「ありがとう、ええの。明日も来るで、待っとっ

ていな、おじいさん。」

と声をはずませて言いました。

「おお、待っとるぞ。」

おじいさんと治郎は、次の日にいっしょに網を

入れる約束をして別れました。

その夜、

床についたおじいさんは昼間のことを

思い出していました。

「わしも魚つかましは好きやったけど、あのぼう

もよっぽど、好きなんやな。」

おじいさんは夢を見ました。それは、万作じい

透きとおるような川や池で、センパラさんがまだ子供だったころの夢でした。

センパラやハリヨ

を捕まえて遊んでいるのです。

ふんどしひとつの真っ黒な少年たちが、陽

かけたり、ヒシの実を採ったり。毎日毎日、とてす。小さな川舟から飛び込んで、大きな魚を追っ

も楽しいことばかりです。

「おーい、飛び込むぞ。」

「こっちに大きい棚があるぞ。」

ドボン、バシャバシャ

「つかまえてみー、こっちやぞー。」

「まっとれーよ。」

に当

たってキラキラ光る池の中を、遊びまわっていま

るセンパラやタナゴは、虹色に輝きます。す。子供たちの侵入に、おどろいて逃げようとす万作少年は、川藻の中をたくみに泳ぎまわりまついには、川の中を追いかけっこです。

「なあ、こっちから見るときれいな青色やぞ。」「おおー、きれーな桜色や。」

といつまでも泳ぎまわっていました。 万作少年は、すみきった池の中を、仲間の少年「いいや、金色やて。」

池一面が七色に光る

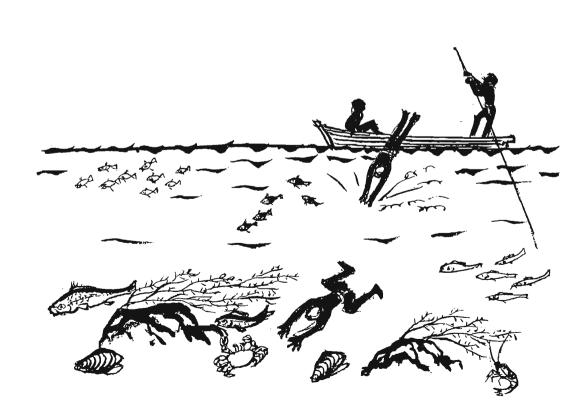
真っ青な空

輝く太陽

桜色のセンパ真っ白な雲

ラ

鈍く黒光るカラスガイ銀色に光るハリヨ



田んぼの緑が風にまう

あーぁ、ハスの花が池の中に

少年の小麦色の肌に

白くしめられたふんどし

今、ここによみがえる桜色の宝物よまるで、昨日のことのようだ

気持ちよく目が覚めたおじいさんは、

と、しみじみ思いました。

「ふうー、昔はよかったな。」

「おお、今日はぼうが来るんやったな。」

昨日の約束を思い出して、、いつもより早めに

起きました。

「おじいさん、おはよう。」

「おお、ぼう来たか。」

「どうやって捕まえるか見たいで、はよう起きれ

た。

「どうせ、好きなことは起きれるんやろー。」

「うん。」

「わしも一緒やで、ようわかるぞ。アッハハハ。」・・/

「これが餌や。」と見せてくれたのは、治郎も見

たことのある犬の餌でした。

「ほんなもんで、捕れるの。」

「これはなかなかとけえへんで、最近はこれば

かや。」

「へー、おもしれーな。」

「何言うとる、何でもかんこうしなあかんのは、

一緒やぞ。」

中に付け、太い竿の先につるして池に仕掛けまし犬の餌を入れた網の袋を、大きな四手網の真ん

た。

「うん、また来る。」「今度は、八時ごろ見にこいよ。」

「おお、足らなんだら、いつでもええで来いよ。」

「ありがとう。」

「これよりもっと、ピンクのセンパラがおったと 治郎はおじいさんと別れた帰り道 に、

ノベ

ケツ一杯のタナゴを捕まえました。ほかにもス

八時になり、おじいさんと治郎は網を引き上げ、

ジエビやこぶなも入っていました。

「ほれ、これはぼうにやるわ。」

こんなに一杯おるで、もしかしたらセンパラが や。

全部入れてくれました。

「昨日も、もらったのにええの?」

と、とれた魚を治郎の持って来た青いバケツに、

おるかもしれん!。」 言うけど、このタナゴも、どえれーきれー

と考えた治郎は、学校へ持っていきました。

「これセンパラと違う?」

と職員室にい合わせた先生に尋ねました。 「調べてみるけど、ちょっと違うと思う。」

「なーにー、その、なんたらタナゴは。」

「うん、これタイリクバラタナゴやよ。」

「きれーやね、このタイリクバラタナゴ。」

「おお、持ってけ・・・。」

と残念そうに言いました。

「ほんでも、どいれーきれいやで、センパラかも

と治郎はまだあきらめられませんでした。 知れんよ。」

63 —

わしゃーわっかれへんがや。タナゴ、タナゴ言

「ほー、むつーかしいー名めぇ、ついとんのやな、

うとるだけやで。」

「きれーな色やろ、桜色やぞ。これ学校へ持って

しばらくして先生から、

「残念だけど、タイリクバラタナゴだね。それに、

阜の山の中と、愛知の山奥にしかいないそうだ センパラは今は天然記念物で、この近くでは岐

から……。」

と聞かされました。

「そうか、きれいなのにな。」

と治郎はちょっと残念そうに答えました。

「でも、タイリクバラタナゴだって学校はうれし

いよ。」

と先生はなぐさめてくれました。

「そうやな、ぼくは万作じいさんと、こんなにいっ

ぱいつかまえたんやもんな。二人だけの宝物を

みつけたんやから。」

と思いました。

今でも万作じいさんは、治郎の顔を見ると笑い

ながら、

「また、来いよ。」

と声をかけ、手を振ってくれます。その時のおじ

いさんの目は、とっても輝いて見えます。まるで

少年の瞳のように。

池辺の池には、たくさんのタイリクバラタナゴ

が、光る体を踊らせて泳いでいます。

あなたが見ても、やっぱり輝いているでしょう。

桜色に……。

64

# 根古地村の道しるべ

がほとんどです。 ので、石の柱に簡単に行き先や距離を書いたもはいる。かんたん 道 しるべとは、昔のお役所が道案内に建てたも の

やすく、温かさを感じさせられるのです。 個人が建てたもので、 ところが根古地の堤防に残っている道しるべは、 内容がとても親切でわかり

ます。()の中はその意味です。 石にほられた文字は、こんなことが書いてあり

△南面>左京道 関ヶ原へ五里の

(左へ行けば京へ行けます。 また関ヶ原ま

で二十キロメートルです。)

人北面>天明九年已酉正月 (一七八九年正月 根古地村) 根子地村

> <東面>水ふかき時ハ 堤通り右へまわるなり

、水びたしの時は、右の揖斐川沿いの堤防 \*®

を行きなさい。)

<西面>尤も 在みちに候得ハ 追々御尋可被成

候するう (もっとも、村の中の道は、迷いやすい ば でその村その村に入った時に、 いいのかお尋ね下さい。) どう行け の



根古地の道標

程前で、 桑名。 に がどうしてここに道しるべを建てたのでしょ ょ そ この道 の る交通 名古屋を結ぶ水路の中継地点として、 頃  $\hat{o}$ しるべが建てられたのは、今から二百年 江戸時代の中頃になります。 根古地 が盛か んでし に は凌が た。 根古地 あ ý, は大垣 ]1] を利 v った • 用 赤坂と L 荷に物っ い誰 た 船

知

の

輸送や旅人で大変に栄えていました。

り、 です。 でした。 てい のように ても揖斐 あいだの土地が低くて、雨が降りつづくと水びた る津島街道が しとなり通れません。ですから旅人は遠回りに ŧ 狐や狸に化かされたという話もたくさんあっきのは ぱまき ました。 た、 木や竹やぶがうっそうと茂ったところもあ 曲 たとえ通  $|\tilde{l}|$ 道 が 沿 るべ りくねっており、 しか 通 V り、 の 堤 11 のそば 京都へ行くのに大切な道になっ 防を行かなくてはなりませ てもこの その道は根古地から鷲巣 には津島から養老に 街道 迷い は輪中の里を蛇 やすかった になっ V W の o の た

たようです。

永田佐吉です。佐吉は商売人としてどや多度などいろいろなところを歩い す。 ていた篤志家として有名な人です。 人々の困っている所をみつけると自分のお金で道 しるべを建てたり、 の数 っている旅人がい 仏 その頃、こうした通りにくい街道のことをよく の 佐吉の人柄の は何と八十八もあると言わ 佐吉は商売人としてだけではなく、 ました。 わ 石橋を作っ かるこんな話 綿たの たりして奉仕をし 買い 11 も残 佐吉 て て 付 6 V けに養老 つ ŧ の た ·竹鼻の 作 て す。 つ ŧ た

て、 商売をしていたのです。 取らせたそうです。 の代金を支払い、 と言えば、 佐吉は綿を買うときに、 ますます商売も繁盛したとい 自分で重さをは おつりが つまり相手をとことん そ のため人々の信 あ からず、 相手が綿の重さを十貫 11 ば います。 銭にはこ そ の か 5 言葉通 またこ 信じ 相 用をえ 手 て に h

橋

も残っています。うした佐吉の考えを表すものとして次のような歌

ううか。堪忍とはがまんできないことでも辛抱すくがまんできたことだけが堪忍したというのであくがまんできたことだけが堪忍したというのであせ忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍



竹鼻にある佐吉仏

「佐吉仏」と呼ばれてまつられており、多くの人々たところの羽島の竹鼻に大仏を建て、今でもまた佐吉は大変に信仰心のあった人で、生まれ

の信仰を集めています。

んが、 とい す。 か。 道しるべを建てたのかがわかってきます。そうで に人の道を示してくれているのではないでしょう ではもうこの道しるべを見て旅をする人は こうしてみると佐吉がどんな気持ちで根古地 どんな人々に対してもあくまで親切にしよう う温かい気持ちをもって作られ 人情が薄くなったといわれる今日、私 た のです。今 ر ر た ŧ ち 也 の

て牧田川となった。注① この頃は揖斐川であったが、明治三十五年に河川改修によっ

#### 学が 疎を 開かい

多田 次 さん の 新 が 闡 持 記事は、 つ てきてくれ 平成 四四 年五 たものです。 月四 日の 一同窓会に

#### 心 の オ ア シ ス

浮かぶ。 目に映るとき、 るほどに緑が濃くなり、 こともすっかり忘れ去ってしまっている。 てもらう。 ら一路、 岐阜出身の友達にバトンタッチする。そこか いやな顔もせず夫が車で送り、大阪住まいで 一番、 遠いところをよう来てくれやしたなも」 神戸から大阪近鉄前まで二年に一度、 名神を飛ばし田舎の会場へ連れて行 そのころには家のことも、 幼なじみのともの顔が次々に い つしか養老山 仕事 脈 走 朝 が め

> のにもかえ難い、 気持ちでみなに合いに行く。 ない。だから今でも親の懐に飛び込むような してくれた。一度だっていじめられたことが を掛けてくれる。 ときの友達が、今も忘れずお仲間としてこえ 養老郡池辺国民学校で四年間お世話にな 町育ちの私を、 待ちかねた知らせが届いた。五月四日。 神戸からただ一人の疎開っ子として岐阜県 キラキラ輝く一日なのだ。 みなは 田舎のことが何もわ いつもかばうように 私にとって何 からな った

11

みんなの声が聞こえてくるようだ。 かみしめている。「春のうららの隅田川 年もきっと行ける幸せ、みなと会える幸せを

神 戸 新 聞

神戸市灘区

多田とし子

自営業

五十八歳

平成四年五月四日付「ふれあい」 欄より

戦争がだんだんはげしくなった昭和十九年のこ

ろです。

あちこちに爆弾を落としていくようになりました。 のあるところは、 東京、 爆撃にあえば、はくけき 大阪、 名古屋などの大都会や、 毎日敵の飛行 機が飛んできて、 軍需工場

る家や学校は灰となり、 多くの人が死んでしまい

町は次々に焼かれて、住んでい

ます。

り合い 疎開と言いました 危険から子どもたちを守るため、 不安な毎日が続きました。 の家に子どもをあずけました。これを学童 親たちは、 田舎の親戚や知 そうした

でも、 なりました。 は 増えた児童で 池 辺 子どもたちを受け入れることになり、 村 にも疎開 池辺国民学校(現在の池辺小学校) v っ してきた子どもが暮らすように ぱ v になっ てしまい ました。 教室

> く ほしい物もすぐには手に入りません。

ず、 た 村に残ったのは、 また、 の 食べ物も十分には食べられませんでし で田田 ん 働ける人は、みな工場などへかりだされ、 ぼや畑を耕すなどの重労働もままなら お年よりや女、子どもたちでし

ければなりませんでした。それでも子どもたちは、 そのため学校では、食べ 物を自分たちで作らな

で、 りおこしたりして、運動場のか 池辺の子どもたちの カマで草刈りをしたり、 仲間に入り、 クワを使 たい なれない手つき 土をたが つ て土 をほ p

え て畑にし、 たり、 山 へ木の枝をひろいにいったりしました。 カボチャ、 さつまいも、 大豆などを植

6 たほどです。 な

か

に

は、

なれ

な

v

作業で手の皮が

がむけた子が

そのために、 学校では勉強らしい勉強は、

ほと

んどできませんで

自給自足の生活だった のです。

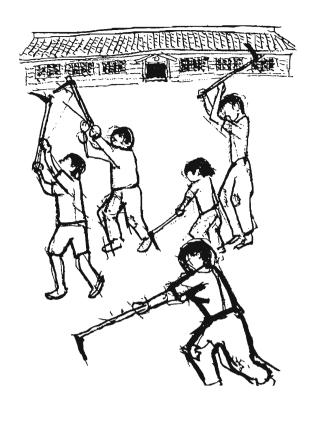
そのころは、

今とちがっ

て、

品物やお店も少な

ました。子どもでも山ほどの仕事があったのです。 分や家族が食べるための するための、 エ ひまは サにするドング 作ったお米は、 子どもたちは学校から家に帰っても遊んでいる ありませんでした。兵隊さんの服 桑の皮をむいたり、 リやか 国に出さなくてはならず、また しの実をひろっ イナゴを取ったりしてい 兵隊さんの馬 の材 た ŋ 料 自 に の



りしていました。それでもまだよい方で、 さつまいもを入れて炊いたものや、 米のごはん に入りませんでした。だから、田 配給制度といって人ひとりに決められた量しか手 W んでした。 つるを細かく切ってごはんに混ぜたものを食べた やいもだけの食事の時もありました。 は腹い そのた めに っぱいに食べることができま 「芋ごはん」とい 舎であっても さつまい って米に すいと ŧ

来て 出 どもたちはそれぞれ立派に成長しました。 ぞれ 疎開で池辺に来ていた子どもたちも、 で元気に会えることの喜びに 話 そして、ときどき開かれる同窓会には、みんな 昭和二十年八月十五日、戦争が終わりました。 に花を咲かせるのです。 v の家庭 た池辺での生活をなつか へ帰っていきました。 ひたり、 しみ、 年月は 当時の思い 学童疎開で 次々とそれ 流 11、 子

## 天照寺の観音様

つり』がおこなわれます。さんの明かりがともり、にぎやかに『観音さんま毎年八月十日になると、根古地の天照寺にたく

下げて飾ります。
また、長い縄にたくさんの赤ちょうちんをつりそれをお堂の前にいくつも並べ、灯をいれます。を書き、いろいろな楽しいあんどんを作ります。を書き、いろいろな楽しいあんどんを作ります。

た人には、豊作や幸せがおとずれると言われていき、赤ちょうちんのついた縄をゆらゆらゆらしまき、赤ちょうちんのついた縄をゆらゆらゆらしまがおまいりに集まり、まつりも最高潮になったとがおまいりに集まり、まにはたくさんの村の人びと日がしずむころ、寺にはたくさんの村の人びと



る のです。

て 11 正 いま 月や盆、秋まつりと同じくらいに、楽しみにし る、うれし の子どもたちはこの l た。 いおまつりだったのです。 お菓子やスイカなどをたくさん 『観音さんまつり』を、 食べ

すが、 金銀財宝を盗み、人をさらったり、 (京都) 来では家 た。 音様は聖観世音菩薩で、比叡山のおぼうさんであずいかんぜおんはさっ ひえいざん た 、恵心僧都という人が作ったのえんだりず 今から千年も昔のことです。都に近い大江山 ところで、現在この天照寺にまつられている観 酒吞童子はおおぜいの家来をつ とても立派ないわ に酒呑童子という悪い鬼が住 やを荒らし回るのです。家屋敷をこわし、 れのあるもの たと伝えられて **∤**( んでいまし なの 京の س 町に す。 ٧١ ŧ

は 困 た りは び か ててしまい さなる わ る さに、 ました。 第六十二代の村上天皇 ので、

人びとにたいへん恐れられてい

まし

た。

殺したりする

つ

りしていました。

そこで、このころ、 都で力のあった多田 田満仲に、

酒呑童子を征伐するようにと命じられま うした。

(足がら山の金太郎)などの強 満 仲は頼光という力のある息子に、 い家来をつ 坂田金時 け ŧ

るようにと、 たが、それでも心配で、 観音様を背負わせて、鬼たいじ 息子の身を守っ ても に行 らえ

酒 香童子を退治することができまし 頛 光 は 不思議 な観音様 の 力をかりて、 た。 みごとに

か

せました。

国(茨城県ひたち市)関宿の小笠原貞信公代々まつられていましたが、江戸時代には ے の観音様は満仲の時から源氏の守護神として は常陸の が おま

で、 音様も貞信公とい 明曆四年(一六五七年)、貞信 美々濃の の高須 次の城主として っ しょに美濃にこられました。 て移ることに 公は幕で な 府ふ ñ, の 観

上人もいっしょに美濃に移ってこられました。しょうにん そのとき小笠原家の菩提寺の住職 であった聖誉

様のお徳を分けあたえるほうが良いと考えました。りしているよりも、苦しんでいる人びとに、観音そこで、このありがたい観音様を城の中でおまつあって、人びとが苦しんでいることを知りました。このころ、貞信公はこの地域がたびたび水害に

毎年夏に『観音さん祭り』をするようになりまして、源氏ゆかりの観音様を天照寺に迎えました。とれた。 とれた かんしゅ かりの観音様を天照寺に迎えました。殿様の話を聞いた聖誉上人と村人はたいへん喜

た。

親しまれ、多くの人びとがおまいりをしています。今でも地元の人に『観音さん』『観音さん』と

### 注① 恵心僧都

築かれた有名なお方です。に住んで学業に励み、「往生要集」を書き、日本浄土教の基礎をこのお坊さんは平安時代中期のお方で比叡山の横川の慧心院

もまつられていますし、正信謁の中にも「本師源空明仏教」にまた、仏像、仏画にもすぐれていました。近くのお寺さんに

始まり、八句説明されています。源空和尚といいました。また。これで、いまでし、立作書の中にも「才会が2月14年

### 注② 酒吞童子

いう物語で、語り伝えられています。 頼光の鬼たいじのお話は、おとぎ草子の中の「酒呑童子」と

# 徳永除(とくながよげ)

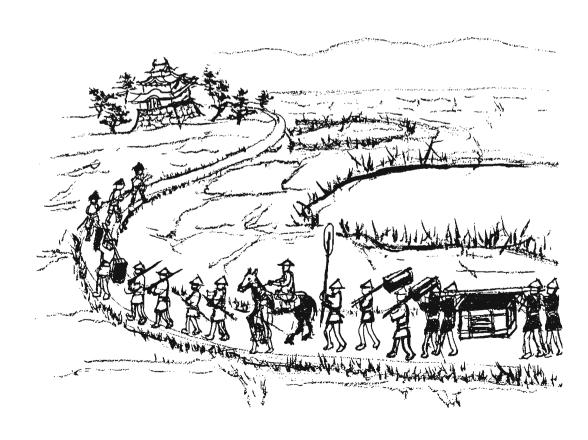
## 釜段に伝わるお話(その一)

三川の東 とったん ほ W どる わし つ 『よげ 也 らがちい W V やが、 た や。 の堤のことを、 道 の っ ほ て れ、 釜段の神 せ 闡 いころから、じ 今は草ぼ V たことあ 昔か 明 神社 らうぼ 5 Ś から駒 『徳永除た』、 うの か 様 15 な。 ちいせえ に 闡 か と呼 の さ れ

なんでかって言うとな。

今 わ か 11 る 5 四 様 百 が 五 お 十年ほど昔に つ た んや。 高な 須す に 徳永 様

様 に L は た が 賤す っ 岳广五 て 四 田勝家を破った合戦の後にな、 九 、羽柴秀吉(カー六〇〇年) (後の豊臣秀吉) し言わい れた殿



殿様は根古地に館を建ててな、長男の昌重(一高須城主(五万五千石)にならしたんや。そんな人に従ってな、どえれー手がらをたてやしてな、人に従ってな、どえれー手がらをたてやしてな、人は、現、海津町)城主にならしてもらえて、そ

柳原、 から、 んど、 や。 んでな。今は車も通らないような所や、釣り人が やっと通れるだけ が高須 五七四年~一六四二年)を住まわしたん 若殿様が馬や篭で、家来をお伴に通 大代、 この辺りでも立派な道のひとつになったん のお城 釜段、駒野新田と続く堤を通わした に帰らっせる時に根古地から、 の荒れた堤になってしまったけ や。昌重 5 枠ない 11 た

らか『よげた』と言うようになってたんやわ。永除』と言うようになってな。それがいつごろかほんでな、殿様のおかげで栄えたこの堤を『徳

をは世次下ろしっちゅう、つうても見ざまう、 をいせえ時と変らんくらい、ええもんやぞ。 さえ気持ちやったで。ほんでもな、今でも秋には さえ気持ちやったで。ほんでもな、今でも秋には すすきが風でゆらゆらゆれる月夜の晩は、わしが すすきが風でゆらゆらゆれる月夜の晩は、わしが また。 とがまでは蛍が飛び交うし、そりゃあー とはずかの中でもこの辺は、よう自然が残っとる。

くで、さぶいであかんけどな。冬は伊吹下ろしっちゅう、つめてぇ風がようふ

どや、いっぺん『よげた』とは、て見る気によっらんと、外へ出てくるのもええもんやぞ。みんなも、いつもかもぬくてぇとこばっかにお

たんと違うか。 とや、いっぺん『よげた』を歩いて見る気になっ

## たか 屋 物に

# 釜段に伝わるお話(その二)

狩りをする場になっていました。鳥の生息地であるところから、その昔、お殿様のます。この辺りは雁や鴨などの渡り鳥が多く、水ます。この辺りは雁や鴨などの渡り鳥が多く、水釜段の北の端に「鷹屋敷」と呼ばれる家があり

がいたところで、お殿様が鷹狩りをした時に休憩鷹屋敷は、村人が鳥を捕らないように見張り番

をしたところでもありました。

藩の御殺生御留場所と言われていました。サ゚ロンザトムサクムはという 釜段、下池、志津。この三地区は、大垣の戸

田

池辺村の中でも一番低地にある小さな堀田でおと暮らしている清吉と言う若者が住んでいました。昔々のお話です。釜段村に病気のおとっつあん

く櫓をこぐ事ができませ ましたが、五三川のどっぽりにのりあげて、 日も一人で川に舟を出して、仕掛けた網 米を作り、 清吉は、おとっつあん お米も、年貢米を納めるとほとんど残りません。 らしていました。 五三川や池で捕れる川 しかし、小さなたん の具合が良くない ん。 の魚を捕 ぼで ので、今 を見にき 取 って暮 うま れる

け出そうと必死でした。とひとり言を言いながら、何とかどっぽりから抜とひ。一人で抜け出すのは…なんぎなことや。」

当に小さな魚しか入っていませんでした。やっとのおもいで抜け出て、網をみましたが本

「せめて、おとっつあんに食べさす魚だけでもと

れたらな……。」

と落胆しながらも家路を急ぎました。「おとっつあん、待っとってくれや。」「はよけえって、でえこんでもたかなあかん。」

のしたくをするにおいや、風呂でも沸かしている とっぷり日も暮れ、村のあちこちから、ゆうげ

の か、 たきぎやわらを燃やすにおいがしています。

清吉がいつものように、 鷹屋敷のそばを通ると、

A バ

バ

9

バ

9

バ 9

と、鳥の羽ば たいてい る音が聞こえてきました。

いつもなら気にもならない羽音が、今夜は、やに

気になりました。

「あれー、こんな所に鷹がきとんのかな。」

9 ノベ 4

「やっぱ、おかしいわ。」

目をこらして見ると、小さな鷹が草の上で、 羽

ばたいていました。どうもケガをしているようで

す。

「鷹屋敷の鷹にちがいねえ。 ふんでも、鷹屋敷な

んか入った事もねえし、おそげえでどうしたら

ええやろ。」

ちょつと考えていた清吉でしたが、

「今夜はくれえで、手当てだけして明日つれ

てこ

や、ええやろ。」

と、懐に大事に入れて家路を急ぎました。

家に着いた清吉は、おとっつあんにわけを話し、

すぐに鷹の手当てをしてやりました。

えに、どっぽりにはまってまって、えれー苦労

「おとっつあん、すまんな。今日は魚がとれんう

してまったで、 おそなってまった。」

「すまんな。わしゃ、寝とるだけやで腹なん いとおへんで、でえじょうぶや。はよーう、 かす

ŧ

めになって、てったうでな。」

「あわてんでもええ。わしゃ、じょうぶい 取りえやで。今度は、ようさん、ふなでもつか だ け

まえてくるでな。」

を炊きました。と、くどの上に刺してあるふなの頭で、ぞうすいと、くどの上に刺してあるふなの頭で、ぞうすい

「清吉、おめえも、はよお一嫁さんもらわなあか二人でぞうすいを食べながら、

とより、ようさん食って、寝てえな。」「いらん、いらん、まんだええ。そんなわしのこんな。」

から、仲良くなった娘なのです。 に出かけた時、いり樋で苦労していたのを助けて を考えていたからです。おはるは、川をはさんだ を考えていたからです。おはるは、川をはさんだ ないのを、満書はなかなか寝つけませんでした。

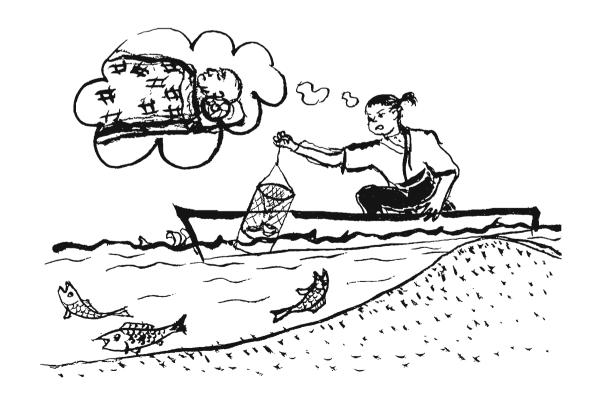
「おとっつあんも、嫁もらえっちゅうし。

おは

る

村

がきてくれるといいんだが、隣村の娘では、



役の人が許してくれないだろうし、困ったもん

だ。こねえーだ、隣村とは除(堤) がこわれた

時にケンカしたばっかやでなー。」

「それにしても、鷹のやつうるせえなぁ。 寝れ 1

せんげ。」

g バ 9 バタ

大きな鷹の羽音で目が覚めた清吉は、 いつもよ

り早く起きると、鷹に餌をやりました。

「しかし、やになつく鷹やな。鷹はこええーもん

やと思っとったけど、かわいいもんや。」

「さあ、こんなことしとったらあかんで、はよう

かえしてこ。」

「おとっつあん、鷹屋敷まで行ってくるわ。」

と言って鷹を懐に入れて家の外に出ました。

「あっ。」

と清吉は小さく叶びました。

鷹はするっと下に落ち、大きく羽ばたいて飛び

たってしまいました。

「ええなぁ、鷹は自由に空を飛べてo」

と大きなため息を一つつきました。

「鷹、飛んでってまった。なんやら、 あほみてい

やわ。」

「さあ、今日は堀田でも行って、どべならしして

くるか。」

と、長じょれんを手に出かけました。

「おはるに会えるとええになぁー」

と楽しみにしながら……。

方鷹屋敷では、

「お館様、鷹が一羽おりません。」

だ。探すのじゃ・・・・・。」

「なに、お殿様からおわずかりしている大切な鷹

「鷹匠を呼べ。」

と屋敷中が大騒ぎです。

「明日は、大切なツルの御成じゃぞ。どうするの

だ。

館様の前に進み出ました。 鷹匠は、厚い革手袋と胸当てをしたまま急ぎお

「今年生まれた、訓練中のひな鳥です。今さっそ く、探しております。」

「まだひな鳥のため、犬に慣れておりませんでし

「そんな事はどうでもいい。はよう探せ。」 たので……やられたんでしょうか。」

と夜を徹しての、大探しとなりました。

一晩中探したのですから、屋敷の人たちはくた

びれてしまいました。

「今日のお殿様のおいでで、鷹匠頭ともどもお館

「困った。困った。」 様にも、おとがめだろうな。」



ヒュルルル ヒュルルル

と鷹の羽音がしました。

鷹を見ると、ケガをしているのですが、手当て

がしてあります。

「お館様、鷹が帰って来ました。」

「ケガに手当てがしてあります。」

「おお、助かった。しかし誰が手当てをしてくれ

られたとふしぎに思いながらも、殿様の鷹狩りの用意にとふしぎに思いながらも、殿様の鷹狩りの用意に

た

の

か

な。

屋敷中が忙しくなりました。

殿様もお越しになり、無事鷹狩りが行われまし

た。

親子の鷹が、堀田でどべならしをしていた清吉

じょれんを使っている清吉は、とんと気がつきまの所に飛んできましたが、いっしょうけんめい長

せんでした。

注① 鷹狩り

平常庶民が狩猟することを厳禁した。まだ飛べない鷹の雛鳥を

飼い慣らし、鷹狩り用に訓練した。鷹匠が扱う。

十日) ツルの御成(十一月)

小鷹狩り(隔年) キジの御成(四月)

ウズラの御成

(十月

注② 御殺生御留場所

地域を御留場と言って、ここでは平常庶民が狩猟することを厳将軍の鷹狩りを行う特定の場所を御挙場と言い、これに準ずる

禁し、ツル、ハクチョウ、ガン、ウズラ、カモ、キジなどを飼

いつけた。

たまける悪い気い日ひず注③ 堀田

水はけが悪い低い田んぼで、土を高く盛って作る水田の事を言

う。

注④ どっぽん

まう場所のこと。 土砂が川の流れなどによって高く盛り上がり、舟が座礁してし

主意、力通

「とっぽり」と言う呼び方もある。

注⑤ いり樋

現在の給排水の水門の旧型のこと。

## 尾 張 橋

る に ぱな橋やなくてな、ちっせえ丸太を並べただけの ような粗末な橋やったん か。 『尾 五 Ξ 張 三百年も前のことやで、今あるようなりっ 川 橋』 の瑞穂 という名前の橋 (大代) と釜段 P ..... があるのを、 にか か る橋 知 の 一 っと っ

う見てみ。ほんでも、「尾張」でもないのに何で今の橋にも「おわりはし」って書いたるで、よ

尾張橋とついたそのわけはな、どぇれー 昔の

や?

と思ったやろ……。

話

品やぞ。

んや。ハリヨ、フナ、コイがおもしれいほど捕れそりゃ透きとおるようにきれいな美しい川やった五三川という名前がついていないころの川は、

う、 るみていでな。 ビなんかも、まるで魚介類 なったシジミが捕れるええ川やっ たし、大きなウナギやツボ、それに今では 五十年くらい前までは、飛び込んであそべるく ほしてなー、 カラスガイやスジエビ、 川がどえれえ深か ほりゃ あ、 良か の宝箱がすぐそば カワエビ、 っ たぞ。 たん ったんやで。 や。 テナ V そうそ ガ なく に エ

五十年くらい前までは、飛び込んであそべるく五十年くらい前までは、飛び込んであそべるくるとおもしょかったんや。それを川ん中でやるんやぞ。おめえらもやるやろ、「おっかけっこ」をな、それを川ん中でやるんやぞ

鼻ケ橋と小はながし ŧ れ、津屋川へ落とす川になったん どえらいエ いるし、 でもな、 流すとこもいるのは、 事やったそうやけど、人が多なりゃ水 坪間 その 川 約四千八百メー は 尾張の殿 トル わかるわな。 ゃ。 の ている下笠、 そりゃあ、 川を工事さ どっ

だあれ、 ちに しても、 ŧ 反対できん 殿 様 が 決 め か た っ 事 た 4 を

蔵屋敷に運ぶために、五三川(のキュル)(のキュル)(なって、年貢米を江戸(なんり) たん 川を下って桑名で千石船に乗せ 堤 4) 今尾の渡しまで運 下って来て、荷車に乗せ代え、 っ )1[ いやと。 現、 が ペ つながりゃ、 瑞 あるでな。 穂 の北 んで 側)まで舟で ええことも、 どえ な、 **∤**( 揖斐 の の 1

やで。 ぶより、 か ŧ 4 そんな昔やなても、 しれ W なは 川 どえれ ができてな・・・・・。 んけど、 「ええ 1 Ī 楽 荷車で全部運 っ に なっ 明治 と思 の た 始 W う

> 揖斐川と めころまでは、 刑 を利 五三川、 用し て舟を使 津屋川、

が水上交通のだいじな川やっ う知っとんのやけどな。 みんなのおじいさんたちは、 多度で焼いた瓦を運んだことは、 どえれー変わってまったでな。 石材 それからな、 て、 や木材を運んできた 信じられへんやろうな。 五三川でくろう 五三 り、 た ょ )1]

うて、 場所があって、 たりし したことはな、 変なふうに土 て、舟が座礁し ていへん |どっ 尾張 砂 Œ た が やっ りしい 橋 ŋ 溜た ŧ す ょ た っ

V

のとこ

んで、なんべんでも直したりしたんや。ろなんやけど、川幅がせめえーし、舟は通られへ

川 か は、飲料水として汲みあげて飲んだり、 んなも聞いたことあるやろうけど、伊勢湾台風 たねぇ水道の水よりどんだけおいしかったか ろかして飲んどったでな。きれいになるんや、き W 5 したりしとったんやぞ。そりゃあ、どえれーえら (昭和三十四年)でこの辺全部が水につかるまで へんぞ。 の かったで、自分らでなんでも苦労したんやで。 ったけどな。今みてえに水道もなーにもあらへ 五三川は水上交通に使われただけやないで。み 水汲んでって、瓶に炭・砂・杉葉を入れて、 風呂水に ゃわ か

張の殿様の領地やったからなんや。名前のつけよことやけどな、この辺の五つの村の内、四つが尾あっ、そうそう最初に言っとった「尾張橋」の

力を入れてくれたで「尾張橋」の名前が残ったんうみてえ、簡単なもんやけど、尾張藩がしっかり

や。ありがてーことやな。

やと。えれー簡単についとるやろう。村の五つが笠郷地区で、三つが池辺地区やったで川」ってついたかって言うとな、川にそってあるっいでに言うとな、川の名前が、なんで「五三ついでに言うとな、川の名前が、なんで「五三

にしとこかな。の話は、ようさんあるで……。この辺でおしまいんでなあー。今度また聞かせたるで……。五三川まあ、いつまでかあー昔の話、しとってもあか

級河川になった。 明治になって五三川というようになり、昭和三十九年に国の一注①五三川…一番古い名前は下笠落江、または五千石落江といい、

### あとがき

低学年向け手作り絵本の製作(平成五年度)と創作活成三年度)、人形劇「下池の大蛇」の公演(平成四年度)、八後、読書サークルでは「池辺の昔話」をもとに、いく子どもたちのために、ふるさとの良さを伝えよこれは平成二年度の読書サークルが、ふるさとで生きこれは平成二年度の読書サークルが、ふるさとで生き「池辺の昔話」が誕生して今年で四年になります。

集めて発行することになったのです。作品がいくつかあるということを聞いており、それをてきました。前回に取材されながら掲載されなかったまとめることはできないでしょうか。」という意見が出本年度「まだお話が残っているそうなので、何とか

動を展開してきました。

昔話の範囲を近現代まで広げ、つい最近まで池辺に自分たちの力でお話を発掘することとなりました。ところがたのみの作品は紛失していて見つからず、

に自分たちで実際に史跡を確かめたり、地区の古老の話が出てきました。地区別に班を編成し、日曜日など残っていた風習なども残すという方針で二十数編のお

方を訪ねたりして取材をしました。

楽しさを感じてきました。に引き込まれることもしばしばで、次第に作品を作る態切に応じていただけ、初めてうかがうめずらしい話態切に応じていただけ、初めてうかがうめずらしい話がのは慣れないこともあって大変でしたが、取材に

作業にはずみがつきました。いての具体的なアドバイスを受けることができ、編集演を聞く機会があり、先生との懇談会で作品作りにつ幸い家庭教育学級で童話作家の北村けんじ先生の講

支援い 謝 をしていただけた種 協力して下さった皆様と、 申し上げます。 ここに「続池辺の昔話」を発行できましたのは監修 ただい てい る賛助 田・後藤両先生をはじ 会員の 物心両面でPTA活動にご 皆様のお陰 め と心より感 取

平成七年二月吉日

辺小学校PTA母親委員会読書サークル

池

俢 種 田 有

集 執 筆 ○印編集委員代表

0 笹 片 井 山 美和美 順子 蒲 黒

田

千恵

美

山水松

裕

進

米山

貴 子

田 美由代

造彦

森橋鍋 谷 本 光秀和る裕子雄代み子 山長西田中谷脇中 中美 川 (恵子 千代

中島

秀子 国

参考文 写真 鹿 児 提 島 弁 供 指 鶴 導

田

仁

献 黒 池 田 辺 幸子 の 昔 話 池 田 辺 中 4 学 羲 校 則 P T

A

編

西

脇三希

御 伽 草子」北 畠 八 穂著

血郷 淚 土 の治 薩 摩義 水」 士 養老 物 語 町 延池教育 委員会編 喜一 著

宝曆 僧 治 の 絵傳 水と薩摩義 比 叡 士山延 伊曆 藤寺 編 信 著

高

町 町 史」養、 の文 老 町 編

老 老

化 財 養老町文化財保護協会編第五十六号」 力 ッ ŀ

山松附近木尾 山 豆

岡田藤村崎

山水西小小片

美 綾友恵幸契未美子

谷脇

大智亮克之友 美詞之加

編集者一 覧

資

料

提

供

伊

智

恵

治

多田

بح

L

村 藤

举子

有

做)

光

光 康

水松長佐木

日

野

横山松日野後種

恵

子

谷永谷

すずず子 悦

田山比原藤田

野千徳

谷永比

子 子 子

栄

久克

丹 治 後

監

大 橋

紀 元 西 脇

茂

橋

本

秀

雄

校

閱

杉 野 は

井

横

直子者子

山細西 ]1]

脇

芳巳

田

西 脇

> 茂 ッ

表

紙

絵

•

題

字

•

力

**ŀ** 樹

> 補 Ŀ

原 画

翔

平

伊

里

野小興

の将博陽摩美光行介菜

島梠

島

宮嶋

中



#### 「続池辺の昔話」

発 行 日 平成 7 年 (1995年) 2 月23日

編集者 池辺小学校PTA

母親委員会読書サークル

発 行 者 池辺小学校 PTA

〒503-12 岐阜県養老郡養老町大巻 1140

☎ 0584-37-2138 FAX 0584-35-3231

印刷盛福印刷

〒503-13 岐阜県養老郡養老町押越 499-3

☎ 0584-32-2131 FAX 0584-32-3989

